

証の柳川



麻生路郎☆主宰

十二月號

no. 391

No. 391

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

昭和卅四年十二月一日発行三十四年十一月

新春本社句会

兼題 #
成 人
積 熱
さし向い
自家用車

川柳雑誌社主催

忘年川柳大会

一九五九年のさよなら句会です。
また川柳の顔見せでもあります。
一人のこらすご出席ください。

日時 十二月六日(日)午後一時
場所 大阪観光ホテル ⑨三五〇八番
市電道頓堀電停東へすぐ
(日本橋北詰東入る)

兼題
司会 黒川 紫香
挨拶 川村 好郎
「口八丁」(二句) 麻生路郎選
「足ぐせ」(三句) 中島 生々庵選
「ドライ」(三句) 市場 没食子選
「過去」(三句) 若木 多久志選

席題 三題(当日発表)

麻生路郎

柳話 各支部選手

支部對抗戦 出席者全員

雪月花句戦 出席者全員

呈賞 各賞三才・五客 六「足ぐせ」二位に不朽洞賞
支部對抗戦優勝者・平優勝者及び「月花」一位の組に
川柳賞

余興 出席者有志

会費 百五十円

幹事 紫台・波舟・いきむ・潮花・文秋・庸佑・狂二・
与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・永断・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切十二月四日)

★忘年懇親宴(閉会後)会場で会費五百円

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉 六〇八一

日本盛酒坊

和やかに 一杯

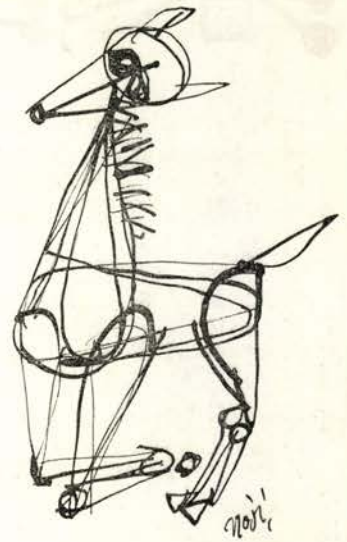
東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



灘の清酒

ニホンサカリ

歳末の言葉



★一九五九年を回顧すると、皇太子殿下の御結婚、それも平民から皇太子妃を選まれたことが国を挙げてうきうきさせた。

★ところが台風十五号で大被害をうけ、全くツヤである。

★自民党は横暴、社会党は分裂騒ぎ、国民は何が民主在民かフンガイする気力もなく、全くその日暮らしのパチンコ民族。

★そんな間にもソ連ではロケットが月に達したとか、月の裏側の写真がとれたとか云ってマスコミが騒いでいたが、私はそれよりも日本では台風研究、台風対策に懸命にならなければウソだと思っっている。気象台が幾ら正確に九百何んミリバルだ、中心の風速が何ん十メートルだと声を震らして叫ん

でくられても、それは医者診断に過ぎない。診断は勿論必要だが診断だけでは病気は癒らない。戦間機につき込むような金があるのならなぜ科学陣につき込んで台風を雲散霧消させないのか。

★ジツと社会を見ていると随分バカなことが多い。選挙違反で日本中を逃げ廻ったり、社会悪だと百も承知だが、競輪は廃止出来ないとガン張る知事がいたり、カミナリ族のような殺人兇器が白昼暴走したり、イヤハヤ、なつちやらんことだらけだ。

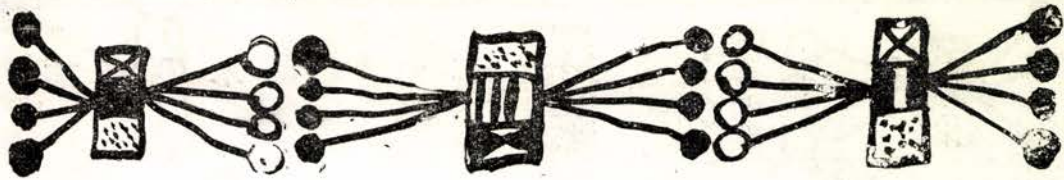
★斯うした世の中を、たたき直して清澄な明朗な芸術味豊かな世になるような偉大な力を持つ川柳は生れないのかとつくづく思う。

(路郎)

川柳雑誌 12月号 目次

歳末の言葉	麻生路郎	(3)
川柳髪形考	奥津啓一朗	(12)
作州の武蔵と 吉川英治の川柳	津田麦太楼	(18)
月へ行く道	高鷲亜鈍	(14)
放送対談こぼれ話	前田伍健	(19)
私のいたいことを いっている句	戸田古方	(34)
母と子の話	東野大八	(30)
集 十二月うれしい風も 特 少し吹け	春葉・古方・白柳 潮花・一瓢・竹莊 梅志・薰風子・晃 一三天	(26)
川柳 名句と難句	麻生路郎	(10)
句箋の中の女	松江梅里	(32)
	丸尾潮花	(32)
	水谷竹莊	(33)
★慢 足講	河本南牛史	(20)
★前書へ一言	高木淡柿	(24)
来日のステーマン女史	麻生路郎	(38)
社の黒板	麻生路郎	(39)
★		
川柳 塔	麻生路郎	(4)
同舟近 詠	諸家	(9)
近作 柳 檣	麻生路郎	(20)
金 泥 集	北川春葉	(20)
各地 柳 壇	麻生路郎	(35)
柳界展 望	麻生路郎	(39)
	★不朽洞会から	
一路集「古物」	長野文庫	(36)
「筆精」	山根白星	(36)
「行末」	金井文秋	(37)
ベンの散歩	金井文秋	(46)

題字……麻生路郎・表紙……野尻 弘



豊中市 戸田古方

未来がこわいのに孫が出来子が育ち
御初穂のころわからんわけでなく

割かれた胃からはしりの松茸

西宮市 若本多久志

縁遠い娘の無理はきいてやり

雑魚であれ私ひとりの夫なり

忍び難きを算盤で割るも輪

若返る会へいそいそ出かけたり

大阪市 正本水客

三曲合奏木立から月視野に入る

大阪市 丸尾潮花

くくられた小猫のようにたたかれて

砂を踏む音だけでよし恋といて

兵庫県 小西無鬼

大きく出たのにカレーでよいと云う

台風

罹災者を喰って日本人の顔でいる

大阪市 西いわを

人違いのまんま話しを合わしとき

口ひげをはずし明治と遠ざかり

大阪市 武部香林

鉢巻の教師に托す子もあらず

ホノルル 古川麗花麗

寝顔ではヒスる女と思われず

大阪市 須崎豆秋

女房の生年月日問うて書き

ヌードショウでれくさく出る背の風

トロロぐろいで通人ぶって飲み

大阪まつりで豊太郎に扮した左衛門大尉知事
落馬して負傷

ユーマアがあつてよろしい左藤さん

ワイマル 羽佐間柳葉

金借りに行けば帰れと犬が吠え

マンデルの法則酒癖まで似て来

奈良県 尾崎方正

晩婚へ仲人の挨拶詰りがち

晩婚へ式の祝辞は皮肉なり

晩婚の式花婿がひとくさり

新婚旅行景色ちつとも見ず帰り

堺市 吉田圭井堂

身に覚えあろうと医者にからかわれ

いつ迄も待つて呉れるは親ばかり

山口県 国弘半休

風呂敷に寝て青空の広さ知る

写真帖父が覗けばハタと閉め

敬老の日の坐りだこ見直され

防府市 長野井蛙

色変えてお次が待つてる愛の羽根

これ以上同情すれば金が要り

新らしい俵せ四十の顔を刷き

大阪市 太田良子

口べたで定年までを隅にいる

裸に近い正装出来るのも女

しゅんはずれ料理屋もつたい振って出し

岡山県 直原七面山

暖房の効いてる部屋で減首され

冬近く案山子もチャンチャコを背負い

出来るなら叩き売りたい娘が二人

医者でなく美術評論家として知られ

二日酔いの僕に似ている昼の月

いつからか子供は親のものでなし

大阪市 西森花村

赤い血青い血ネオンのような人体図

奥様がベンキ屋に来る草月流

売出しにはさまれ米屋おちつけず

質草の種を月賦で又仕入れ

鳥取市 河村日満

顔にケチつけて仔犬を捨てさせる

会者定離秋の日ながらさりながら

伊勢湾台風

台風通過日本の位置を子も嘆く

疑心暗鬼聞えぬ声まで聞いてくる

倉敷市 木村千容

ここへ来てお坐りやすと冷たい眼

割切っていると校長に自信あり

おじいちゃんウンで金婚むかえたり



加賀市 野村 味平

生ブドゥたわいなく酔うが可笑しゅうて
台風がそれたうれしさ足袋を脱ぎ
ハイボールとはおっさんに不似合な

大阪市 木村 水堂

長いものに逆ってみたいサングラス
勉強は出来んがうちの子よく走り
妻に酒酌いで庶民の秋祭

高槻市 福田 丁路

札束を積んで引抜きしたとかや
明日も亦かくてありなん投げキッス
意気地ないのは男の方でありにけり
秋や秋スピード違反何のその
実直を認められながらの平社員

大阪市 真鍋 一瓢

寝る為の酒を子の眼よ妻の眼よ
帳尻を合わす男か君も亦

定年者を送る日に

君も原価償却したか定年か

大阪市 後藤 梅志

狡るそんな顔がでてくる清交社

自衛隊所見

自衛隊花園があり池があり

アメリカの銃が重たい自衛隊

見学団キヤッチボールの横をぬけ

米子市 小西 雄々

雀よりかみなり族で眼をさまし

パトロールネオンの街へ歩をゆるめ

衣食住足りて娘のやせ葉

冷戦を重ねて夫婦輪をとり

勝谷山川見氏を悼む

白鳥も見えず突道湖雨が降り

大阪市 山川 阿茶

子を置いて後添としての子を育て
乞食さえ人を好んでお辞儀する

大阪市 金井 文秋

孝行をしたよに白痴事故で死に
商売に芽が出かけると寝付く運

一冊きりの雑誌を汚ながつて買ひ

少女小説ええしの娘いけずにし

W 過剰ハンドバッグのように提げ

大阪市 北川 春葉

観光バスに乗ればガイドがシャンに見え

たまさかにタクシーとばせば道悪し

下手くその野球大人もよく遊び

近松の恋教養として見とく

仏壇屋近所に負けぬ朝を起き

君ももう帽子をかぶるほどに禿げ

母ちゃんの白髪末っ子抜きたがり

岡山市 浜田 久米雄

水害を偲び鈍子を追加せず

手を口に持て行く合図ついで出る

近代語解せぬままもしあわせか

皮バンド時代遅れは定年か

肉身を殺した記事を指で指し

岡山市 逸見 灯竿

神風は昔のことぞ伊勢襲う

月淡し罹災者の影行交いて

災害へ自民社会は喧嘩せず

出雲市 尼 緑之助

一生を金に追われるかおかたち

朝寝ぐせこれも家風か湯がたぎり

大阪市 水谷 竹莊

方正氏の御結婚を祝す

医長にも大唱婦随の好い姿

鳥取市 杉谷 湖山

ローンクへお墓の風のきつい事

お仕置き場三百年のままの草

西宮市 小沢 史葉

取引の道具にゴルフ習う身の

役得の事は言わずにクラブ振る

京都市 大鶴 喜由

仲の月丘まで誰と歩るこうか

転宅ときまり子供を抱きに来ず

あたしの人を撰ぶに言葉すぎる母

何かにつけて損いく顔に産んでくれ

尼崎市 小林 文月

満員車車掌の室がうらめしく

出張のうちに祭りは済んでおり

美人なるが故に小柄もよく目立ち

東京都 山根 白星

真打ちの赤貧洗うが如きとか

缶詰ですます女に養われ

お迎えが近く音などない世界

よこしまな恋を見ていた夜なきそば

団体はオーバを脱がぬまま拝み

岡山県 福島 鉄児



主婦の座に戻れば女医も子がつれ
結論を云えと邪魔くさそうに聞き

岡山市 服部十九平

適齡の娘があり門を石に替え

家宅搜索ラブレターまで持って行き
間違いがあって監査の座が保て

尼崎市 長谷川三司

貧乏を自慢にきょうも呑み歩き
終りかと思う喜劇のまだつづき

兵庫県 若林草右

療養の窓に遍路の鈴流し

山雀のように仕込んで妻機嫌

熊本市 有働萊春

台風が予算の地金さらけ出し

貸切のバス颯々と阿蘇の秋

広島県 山田季費

夕立が後のプランを替えさせる

腕まくりした方が負けて居るケンカ

合併の町政舗装を仕はしめる

大阪市 山本葉光

齡甲斐を才女に軽くあしらわれ

惚れたから惚れろと無理なプロポーズ

岡山市 田村藤波

独りだとわかって押売強くなり

ロマンスを語る養老院の月

植木屋に帰れば盆栽生きかえり

岡山市 岡田夜潮

病み上りテストに歌を唄って見

親と娘を競馬のようにボス狙い

茨木市 下山清潮

秋祭に台風の分差引かれ

台風へ又釘を買い板を買い

児島市 本田恵二朗

雲がくれちよくちよく金ができたらし

京都市 松川杜的

坪一万と云う空地のキリギリス

恐ろしやメンコの数字で株遊び

空地の縁もおさらばか家の建つ話

綴方子は貧しさを恥とせず

鳥取市 森本法泉子

機関車の発車堂々というかたち

婆さんと自分も呼んでまだ動め

新築を飾る小説買い集め

病院のながい廊下を拭く仕事

岡山市 津田麦太楼

曼珠沙華まつ赤に燃える無縁墓

おっさんの英語ジーシーチーを撒き

食通が鱈の臍にも一と談義

ニコヨンの将棋を秋の陽が江る

寂光もつれなし避難の屋根に寝て

吹田市 橋本幸男

伊勢湾台風を見て

ここまではつかりましたと壁が落ち

堺市 高崎雄声

金なくて真面目に暮すのも寂し

せめてもの慰め友の不成功

次々と去りゆくものの噂をし

高根県 藤井明朗

宿命にしては無情な台風禍

お人好しがいて内証事はかどらず

岡山市 永松東岸

破産して一人静かに持つ碁石

御本家の裏庭鬼気の迫るよう

つんぼうと話せば自慢ばかりされ

ハンストで胃病を直すつもりかや

曼珠沙華造花の如く墓めぐる

倉敷市 野田素身郎

冗談をそのまま評定書に書かれ

駅弁でよいのに母は寿司を巻き

胎動はあなた似らしい乱暴さ

大阪市 伊達堰子

海岸とおんなじパンツ街をのし

靴磨き親はあるでとうるさそう

諦めた恋に花あり曼珠沙華

尼崎市 坂田東洋男

団地族冷めたうどんが届けられ

電化生活の夢月賦で一步一步

新聞を敷いて未来を語り合い

兵庫県 酒井ひか平

ふるさとのここに半鐘があった筈

フラフラしきまっとくからけつまずき

バナナむくように女は腕いで見せ

頑として牛はゆっくり用を足し

宇部市 津秋六花



出世してゐるような墓場の掃除に来
定年近し俺の存在無視される

神戸市 丸川 初甫

団体が退いて壁画の側へより

文楽「生写朝顔話」

大井川まで芝居はすぐに来て仕舞い

岡山県 池田 古心

桑の実が稔り母恋う心立ち

東京都 石居 高志

車窓から見る名月の旅情めき

貧しさに負けず娘のよう肥り

高野山雑感

奥の院俗化喜ぶ墓も出来

大阪府 早川 清生

本心を大阪弁にして教師

長男が中学刑事の足にぶる

日本育ちの鮮人にして窺う目

基会所主棋士の望みを捨てた過去

大阪市 武部 若菜

災害は隣りと大阪の花火

堺市 辻 圭水

納得のいかぬ人事よ平の身に

麻雀のさなかに上役意識する

ねだられる覚悟は親に出来ていず

大阪市 児島 与呂志

ドン底の暮しいや味もよう云わず

流行はウチの女房も髪を変え

西宮市 小浜 牧人

握り飯どちら向いても秋の白雲
民主主義智者は漁夫の利の狙い

西宮市 菱田 満秋

片肺日記

恋人のもたれる左の胸を貸し

兵庫県 前川 左文字

よき人の手には素直な花なりき

袋ごとサラリ奪ってまだ不足

泥棒のような勤務で喰いつなぎ

大阪市 橋高 薫風子

恐妻家どこか張子の虎に似る

見合にも口数多き男なり

緞帳の豪華さに酔う女にて

居酒屋の楽書帖に詩人の名

あたたかし孟母のような母ならで

下関市 中村 九呂平

遮断機を見極めて母引き返えし

弁解が段々事実からはなれ

お役所は箸の上げ下げまで規則

奈良市 宮口 笛生

白壁をバックに柿の実が熟し

大安に頼る結婚式降られ

大阪市 榊 本蔭 児

静かなりあまりにも静かなり病院の夜

大阪市 池戸 桃村

小学のピリが自家用車で帰郷

大阪市 西川 晃

釜ヶ崎風景

ベテン師も素顔に戻る釜ヶ崎
負けバクチばかり残って寒い夜

刑事とは知らずええとこありませ

鳥取県 田中 蛙眠子

おまわりの他所行きハンチングが似合い

名古屋 野田 一念

伊勢湾台風

泥水で仏壇洗う老いた人

ビスケツト抱え笑いを忘れた子

空からも愛の急行便が付き

台風へ庭のコスモスよくぞ耐え

神戸市 仲 どんたく

まだ働かずつもりかビタミン配給し

始球式会長の骨ボキとなり

平田市 久家 代仕男

争えぬ年だよ背のして見る熟柿

競売へ金の無いのも値踏みに来

大阪市 本多 柳志

台風へ都市よ貴方はもろかった

百年の計水はチャンチャラおかしがり

宿題を見つめて灯下親しめず

彼岸

善人の顔でくぐった大鳥居

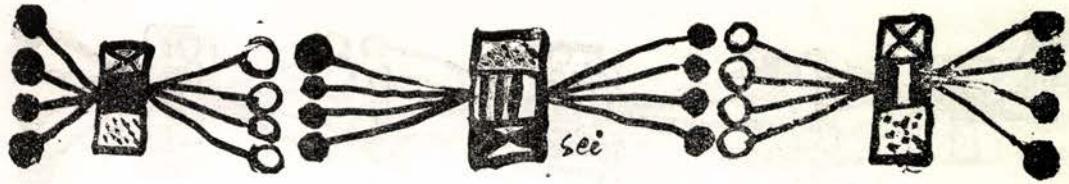
仏おも信じ手相も信じ切り

集金の猿へ彼岸の鐘がなる

サンドマン足をゆるめた亀の池

出雲市 原 独仙

急病死結局愛玩されただけ



駄句ひねり独りよがりもまた愉し

大阪市 大谷月都

悲鳴のような怒号を上げて我を通し

バスで見た人が迎える山の宿

岡山市 江国 幽谷

濟みませんけれど女を道具にし

いつ来ても母は破れた障子を見

趣味のない男が庭を掃いており

岡山市 光 好陽子

もう十年若けりゃなんて口説きに来

尼崎市 徳 永 鬼美

母の手をひいて四十のてれくさや

やけくそに見えるスカート脛を出し

西宮市 河相すゝむ

はったりのうまい奴ちゃが憎まれず

泥んこで月光仮面が帰って来

西宮市 野 呂 鶴江

小鳥飼う愛もあるのに子を叱り

たよられる僕に借金取りが待ち

十五夜へスキも金になる都会

西宮市 樋 口 舟遊

キスの夢布団に触れていた唇

新潟県 高野むじな

学術優等を悪い方へ向け

頭金にも足りぬ月給で買うバイク

大阪市 欄 蘭

又豊作家庭電化が完了す

大阪市 魚住 満潮

生みの親ふたたび霧の中へ消え

縄のれん出た鼻先へ赤い羽根

おんなおとこ死ぬ相談も時によし

堺市 田中 狂二

訪問へ社長室から出迎える

長家まで送って呉れた自家用車

大阪府 林 昌男

嫁ってから僕が好きだったと気付き

いつわりの恋をささやく灯の赤さ

愛媛県 村上 旭童

有り金を皆かせという男が来

台風に耐えぬいて来た案山子です

熟れきった姿で街から帰って来

子が二人まだおっさんの顔でなし

借金が程に牛の子売れた酒

倉吉市 大前 鳴恍

夫婦仲間われて妻は目をほそめ

伊勢湾台風

豊作を半分切って川となり

鳥取市 北村 三歩

新婚の泊り代ったるぜ代ったるぜ

保険屋も紹介をする趣味の友

長島が打った打ったとまたさわざ

万葉集解るんかいと見くびられ

演芸会

馴れてるやろと今年も馬の尻

女形ならと課長もみこしあげ

神戸市 傍島 静馬

台風に役所の屋根が先に飛び

ロケットのそれから月が俗に見え

笠岡市 木山 遠二

弁護士の手柄死刑を無罪にし

炭団炭団しまいは三角のをこさえ

睦まじく行儀正しく老夫婦

大阪市 中谷 ハナ子

深み行く秋コマージュの忙がしく

大阪市 村山 光輪

祖母ふつと昔を偲ぶ花を活け

栗拾い結局店で買うて来る

出雲市 野村 岬月

秋をふむミシンの音も嫁きおくれ

嫁かないと言わなくなつて二十八

勝谷山川児氏を惜しむ

惜別の情はるかな湖があるばかり

大阪市 平沢 保美

幼稚園戻れば流行歌を歌い

社会科へママ旧姓を尋ねられ

布施市 森下 愛論

ゲイボーイと知りつつドキンとさせられる

美人です美人です匂いで判ります

姫路市 植村 客遊子

寄り添うて蝶ネクタイを買うてはる

神戸観光ホテルにて

首だけは雨に打たせて露天風呂

岡山市 宗高 矢寸志

モーニング着ても味見をして回り



切り抜いた本の広告又忘れ
年寄の頑固が月賦では買わず
赤電話女くるつと背を向け
帰郷する夜道灯影がほつとさせ

大阪市 河井 庸 佑
盛装へイミテーションもお供する

大阪府 谷 沢 好 祐

割当てでない割当ての羽根が来る
お手当が付くと日曜追出され

ムンムンと男の臭う守衛室

タコの吸出しへお医者返事せず
泥海の鼻先にネオンきらめいて

泉大津市 高津 徹 也

ジャンケンに三つしかないおもしろさ
ほりものは勝つてゐる時は要はなし

化粧室男どうやら追って来ず

愛媛県 榎 紫 光

愛は惜しみなく与えて疑われ
親分に見込まれ臭い飯を喰い

写される隣の女まで澄まし

目は雑誌耳はラジオへハイテー
貯金まで出して来たのに待ち呆うけ

青森市 工 藤 甲 吉

今だから話す赤紙にはあわて
不幸中の幸いへ来て飲まされる

郷愁の匂う手紙を妻へ書き

玉野市 伊 原 明 林

酔うて酔うてふとんの中まで唄う父

おとなしくボスを帰らす女秘書
一灯を子の勉強に内職に
月給日控除の欄が多過ぎる

西宮市 門 永 三 舟

二三日経って邪慳を気にし出し
方言をメモして帰る一人旅

大阪市 藤 村 梨 花

思いついた言葉で不遇なくさめる
もう擬装する手もおぼえフェミニスト

通天閣上にて

美しき夜景汚濁を灯でつつみ
相生市 富 永 夢 路

似合わないネクタイ恋がしめさせる
寒い日も腕がせる母のきれいい好き

同 舟 近 詠

松山市 前 田 伍 健

台風禍結局政府攻めて無為
富山から来るくすり屋もベンを持ち

世は不思議国旗国歌をきらう人

美濃加茂市 東 野 大 八

黒い水廬

伊勢湾台風被災地に行く

豊稜の稲がもずくの様に揺れ
死臭満つ箱の白さがまだ続く

ロソクの光る柩は水が垂れ

あの辺にテレビが潜む黒い水

飢餓そこにギラつく黒い水憎む
人もなくただ海鳴りの届く屋根
種麦の袋一つと老農夫

「だめだなも」いった老婆はそれっきり
生きてさえいれればといった虚しさよ

ゴム長も足もふやけて屋根と水
水のないとこへ行こうと父と子と

決潰の長さ遠さへ光る水

生きのびて赤いリングをただなでる

今治市 長 野 文 庫

秋の夜を短かいものにするテレビ
大阪でなくとも買える栗おこし

生活に案外もろい元課長

立読みの落付きがりが苛立たせ
買う人もなく棚ざらし名士伝

売れぬ木天井近くの棚に置き

団体の背景となる二重橋
親分を社長と呼ぶす砂利会社

和歌山市 秋 月 宏 方

だんご鼻描けば似顔になる名士
出世して社長と飲める地位となり

増資するように年子が生まれ

乳房揺れて青春謳歌する如し

くたびれた顔ともいわず美粧院

郷愁に似たもの芒に風があり
合オーバから二合壊祝いでい

シャンソンの隣りは空いている貸間

間違つて出来たと末子又言われ

新居浜市 月 原 宵 明



川柳名句と難句

麻生路郎

〔四一〕

颱風のあんな力が欲しくなり

(路郎)

いつも台風が発生するたびに思うのは台風の無限に近い強大な力である。彼は悠々として、しかもかなり早い速力でやって来る。そして防備のないところを知っているように、暴力をほしのままにする。この時ばかりは人間の無知であることを思う存分知らされる。

この句の「あんな力が欲しくなり」は彼が発揮する暴力が欲しいというのではなく、何物をも怖れぬ絶大な力、現代の科学では太刀打ちの出来ない強靱な底力が欲しいというのである。

では台風とはどんな風かという、南洋や南支那海などに発生し、日本、フィリッ

ピン、中国等にくる猛烈な暴風雨で、熱帯低気圧の一種である。

もとは「颱風」と書いていたが、当用漢字にないため台風と書かれるようになったのである。

しかし、台風の標準は何回か変わっていて、太平洋戦争が終つてからは、中心の最大風速が三三メートル以下でないと台風とは呼ばないそうだ。昭和二十八年六月からは、日本独自の番号で名まえをつけることになり、その年の通し番号で呼ぶことになった。

中国では台風のことを「颶風」というているが、日本で「颱風」と名付けたのは元中央気象台長の岡田武松博士で、中国語の「颶」の字をとりいれ、英語のタイフーンの韻をふんで、たいふうと呼ぶことにした

のであった。

中央気象台刊行の「気象要覧」には明治三十九年から颱風という名称が使われているが、この言葉が一般に通用するようになったのは大正のはじめからだそう。

〔四二〕

読み耽り一そ冷いのも女

(一瓢)

二十七八の眼鏡をかけた細面の女性だと云っただけでも、何んとなく冷たい感じがするものだが、女性が読み耽っていて、一寸声をかけても振り向きもしない姿は、更に冷い感じがするというのである。

たしかに、そうした女性の一面を感得的につかんだ句だ。

〔四三〕

たたられる榎市役所よう切らず

(梅志)
だいぶん昔の話だが、松山市の街路に、大きな榎木がニユッと突き出ていた。それがたしか榎だっと思うが、それを切ると崇たられるというので、市役所でもよう切らないのだとことだった。この句を読んだ遠い昔のことを思い出した私は、斯うした伝説が各地にも行なわれていることを思った。そんなことは迷信に過ぎないという人がいて、それを切つて崇たられた事実があるとすると、迷信にも現代科学では割り切れぬもののあることを思われる。

〔四四〕

かかる世に逆ろう如く人力車

(光郎)

今でも地方では人力車が幾らか残っているのであらう。それにしても自動車やバスがどんな田舎にでも普及されている今のよな世の中に、一人が一人を乗せてヨボヨボと走っている人力車を見ては世に逆らっているように思えたのであらう。

人力車といっても、今ではその姿を見た人に乗せて人力で引く車で、明治二年(西暦一八六九)の頃に東京の八百屋鈴木徳次郎、和泉要助、高山圭助らの三人が西洋の馬車からヒントを得て考案した木車鉄輪である。相乗りと云つて二人乗れるのもあつ

た。大正時代からゴムタイヤで盛んに行なわれた。明治の顯官や富豪などは自家用の人力車を持ち着せの法被を着せた車夫に肩で風を切って走らせたものである。庶民の乗る人力車は辻待ちや町なかで拾い車をするのが一般的であったが帳場というのがあってそこへ云えば帳付けで車をまわして呉れた。この制度を最後まで利用していたのは新聞社や銀行などで昭和の初年頃まで残っていた。

第二次大戦後輪タクと称して自転車式のものが一時期復活していたが、自動車の敏ではなかったのを姿を消してしまった。

〔四五〕

世の中をなんのへチマとガム噛む娘 (七面山)

「世の中を何んの糸瓜と思えどもぶらりしては暮らされもせず」という狂歌の引用句であるが、「なんのへチマ」と「ガム噛む娘」の「ガム」との対照がすこぶる妙であり、「世の中をなんのへチマ」という上五、中七が「ガム噛む娘を」実に巧みにモディファイしていると思う。

〔四六〕

詰めよられても耳糞掘っており

(夜潮)

をつかんだ時事吟だ。

何んという飄逸な句であろう。浮世の苦勞にさいなまれた上にもさいなまれ、いくら「詰めよられても」借金を返えすすべもなく、ただ呆然として耳糞を掘っている姿が浮彫にされて見える句である。

これほど自然に、しかもユーモラスに詠まれた写生句は珍ない。

〔四七〕

ボーナスを片手で受ける反主流

(方大)

自由党に主流派と反主流派とがあるが、この句を見ると、あっちこっちの会社にも主流派と反主流派があるらしい。反主流派にして見れば、どうせ今期のボーナスは雀の涙ぐらしか呉れないものと、たかをく

くった態度を「片手で受ける」と中七に表現したところが、この句のヤマである。

〔四八〕

フとアイク行ったり来たりするそらな (味平)

世界を背負うて立つ、ソ連の首相フルシチョフとアメリカの大総領アイゼンハワーの二人が平和探索のための相互訪問を詠んだもの。「行ったり来たりするそらな」と軽く読み捨ててはいるが、果して平和の条件が見出せるかと作者は大きな眼をみはって、疑問を投げかけている。世界的な大物

「フ」はフルシチョフの略、「アイク」はアイゼンハワーの愛称。次に二人の巨人の略歴を簡単に紹介しておこう。

フルシチョフ (Khrushchev, Nikolai Serezhin) は一八九四年四月十七日に、ウクライナ国境に近いロシアのクルスク県カリノフカ村に生れた。炭鉱夫兼羊飼いをしていた父の助けをしたのち、ドンバス (ウクライナ) の炭鉱でパイプ工となった。十月革命の翌十八年、二十四才で共産党に入党した労働者出身の政治家。一九五八年三月首相に就任した名実ともにソ連の实権者。六十五才。

アイゼンハワー (Eisenhower, Dwight David) は一八九〇年十月十四日、アメリカのテキサス州デニスに生まれた。父デュービットは土木技師で、アイクは六人兄弟の三男。幼時にカンサス州アビリオンに移り、高校時代は腕白者でフットボールの選手だった。好きなフットボールが続けられるというのでウェストポイント陸士に入り一九一五年卒業、九年間の通常勤務を経て一

九二六年陸大を首席で卒業。一九四二年以降連合国(北阿、地中海西部、西欧等)第二艦隊總司令官。一九四五年參謀總長。一九四八年コロンビア大学総長。一九五一年欧州防衛統一軍最高司令官。一九五三年一月アメリカの三十四代目の大統領に就任。

〔四九〕

団体でさほれと赤い旗が立ち (春雄)

待遇問題で労資が対立する。なかなか解決がつかぬので労組がストに踏み切る。共産党が応援に来て工場の屋根やら塀に赤い旗が飄る。それは、お前達はサボツとれ、闘争はオレ達にまかしくとけという風に感じたところである。労組は働らきたいのだ。赤旗よ考えて呉れ。(作者は三上春雄氏)

御贈答に

大丸の商品券

三百円〜一万円

大阪心齋橋

京都、神三店の他、高知、鳥取、下関、別子、博多に共通し、一階 御堂筋側



川柳髪形考

奥津啓 一朗

女性の髪形を大別して、日本髪と洋髪に別けることが出来る。今ここに川柳を通じていささか明治以降の変遷のあとをたどってみたいと思う。

日本髪の総称に呼ばれるものに桃割、銀杏返し、島田、丸髻、唐輪、垂髪等があり、洋髪には束髪、女優髻、耳隠し、断髪等の称がある。

寛文年間、東海道島田宿の遊女達の始めた髪形により島田髻と呼ばれ、しめつけ島田、やつし島田、小万、腰折、小枝、きりずみ、結び、とりあげ、根細、文金、つぶし、かけおろし、いたこ、吉原など島田の名を付した髻が、江戸時代全期を通じて大に行われ、明治、大正を経て今日に至るも行われている。

後から前から島田見つくされ
冬眠子
つつましく馴って高島田匂ひ
起句男

高島田自分の影を見通さず

勇之助

お転婆を三日封じた高島田

孤郎

遠くから両手をあてる高島田

飴ン坊

平打をキラリとさせる島田行

木昇

結綿の女工嬉しく冷かされ

茂雄

丸の内島田にみんな振り返り

小次郎

美しい邪念は島田に結って

半七

周遊へたやう丸ビルへ島田で

不倒人

鏡台を父と見に来る高島田

碧木

はにかんだ小僧を連れて高島

寿山

高島田工夫の鶴を乱れさせ

旭花

文金島田を詠んだ句は

文金の娘暖簾をやっと扱け

觀面坊

十四、五才から十七、八才ぐらいまでの若い娘の結う髪形に桃割というのがある。明治時代に入って生じた髪形で桃の実に似たところからこの称がある。

桃割のように髻の形を輪状に結うものを輪ものといい、銀杏返し、唐人髻、おしどり、ねじ梅、鹿の子天神、三つ輪、稚児髻、糸三髻などの種類がある。

此の親にして桃割の値が定まりしる粉屋の桃割お父さんの恋
七厘坊
春秋

初めに江戸の十二、三才から二十才位までの一般女子が結った銀杏返しも、明治に入り、髻の大きなものが娘義太夫などの芸人に行われ、粹好(いきご)みの娘でその形をまねるものがあり、また三十才前後から、それ以上の後家及び花柳界の女性にも喜こ

ばれた。

丸髻は江戸初期の遊女勝山から起こった勝山髻の別名であったが、享保ごろに別な髪形の名称が移り、幕末に至ってふたたび勝山髻の变化したものが丸髻と呼ばれ流行し出した。

江戸では一般に既婚の女性が結ったらしいが、京阪地方では勝山が多かった。明治以後は東西を問わず、既婚女性の表示のようになった。

丸髻になって聊か淋しがり

天民子

丸髻で嫁嫁らしく行き届き

十の字

丸髻のまだ気にかかる手があり

兵六

町内を口惜しがらせる髻になり

柳葉

結びおったなああと亭主は後ろ

葛丸

丸髻に結はせて見ればつまらない

曙山

丸髻の何処かに残る幼な顔

柳洗

笑ってはいやよと髻を結ってみる

菊郎坊

手拭を取ると丸髻撫でられる

夜半杖

丸髻の走り兼ねたる歩きやう

碧煙

結び初めの髻は長屋を逃るやう

鹿峰

味の七-J

モダン 川柳

心育橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい



あんな顔でもと丸髻を見る

蘭華

居眠りをする丸髻は重たさう

敦磨

丸髻に結って淋しい顔になり

南丘子

若妻は、髻に赤い手絡(て

がら) (髻にかける裂) をかけた。

赤手柄砥石いろく向を替へ

葛雄

赤手柄二階の書生若くして

東一郎

我儘の一つ手柄が赤すぎる

文銭

また年長者は次第に髻を小さくし水色のをかけた。

文銭

苦勞性もう水色の手柄なり

すべ六

週末を粹すじに髻を結はせ

て箱根、熱海等にしげ込む紳士が多かった。

芸者今日何処へ行くのか髷に結び

四五日も前から髷を心がけ

不浪人

明日髷を結ぶ約束をして別れ

空 壺

遠出髷矢張り都の灯が嬉し

汀 柳

遠出髷昨日を夢のやうに解き

三 笠

年をとつても

姑婆始ほどな髷をつけ

萬 雄

のものもあるかと思えば、

貞婦二天にまじえずと髪を下

ろし有髪の尼となり一生を過

ごした女性も多かった。

總會の隅に切髪一人居る

盈 光

切髪にもう用のない小間物屋

稲 生

洗い髪のと軽く髪を櫛に

巻きつけた姿も粋なものであ

つた。

櫛巻に結って女房忙しさう

よし丸

櫛巻は言ひ切らずして立って

行く

二柳子

櫛巻で来て婦人科に寒く居る

○ 丸

垂髪は江戸幕府の大奥で将

軍の婦人や子女が大札のとき

結つたといわれ、唐輪は中国

女性の髪容をまねたもので、

児輪(ちごわ)とも云う。

姉さんはもう日本髪ばかり結

ひ

文 城

日本髪悠然として背が低し

路 郎

洗濯へ力の入る髪が掲れ

弁 天

妬ましい髪で互ひの世辞がよ

繁 二

髪結って座敷汚なく見へて来

る

水 府

差し向ひ髪の匂に只黙り

女 神 丸

おとなしい髪で一日針を持ち

一 滴

嫁入りが近く日本髪に結び

清 眸

子に髪を引かれて止める子守

頰

いっそ今日逢ひたくなつた髪

はる子

こゝした情緒もはや戦前の

ものとなり、

初出勤まぶしがられる日本髪

若 菜

人の髪ばかりで出来た日本髪

句 軒

松の内や、一生一度の婚札

の文金高島田さえ大部分が鬘

(かつら)ですます代用品横

行の現今である。

明治十六年鹿鳴館の竣工な

り、井上外務卿の主唱で洋風

の社交界をつくり、国際親善

をはかるべく、夜毎に舞踊会

がもよおされ、当時貴顕淑女

は妍を競うのであった。

舞踊会の流行は衣服の変革

をもたらし、当然在来の日本

髪では不便であり、ここに髪

形も次第に洋風化していくの

である。

髪を簡単に束(つか)ねる

風は古くから庶民の間に行わ

れたが、欧米文明の影響で明

治十七、八年ごろ、上流婦人

間に洋装、洋風の束髪が流行

し始め、当時は洋装のときだ

け、束髪にしていたが十八年

(一八八五)七月渡辺某、石

川某等が「婦人束髪の会」を

起し、従来の日本髪の欠点を

あげ、大いに洋風束髪の宣伝

につとめてから以後次第に普

及流行し多種多様の髪形が生

れた。

髪結がいふ束髪の抜衣紋

阿弥丸

束髪にして面長を自覚する

嶺 月

束髪はお止しと世話を焼いて

みる

半 七

束髪で来て本当の任に見せ

銀 坊

束髪の口絵に似てる娘と出逢

い

女優によって始められたと

いう女優髷には

女優髷ザラ／＼光る櫛を挿し

栞面坊

あの髪がこれから流行る女優

行く

三四四

女優髷とは梳き髪の出来心

水 府

七三女優髷とも呼ばれた

先生も七三だわと妹言

螢 石

また前後して耳隠しという

髪形も行われた

継母もやっぱり同じ耳隠し

夜又王

耳隠し人に知れない年をとり

懷 空

耳隠し毛系づくめの子を連れ

て

耳隠し良夫の無口を切ながり

正 坊

先生が驚いて会う耳隠し

華 紅 史

第一次世界大戦のとき、欧

米の従軍女性が衛生上から始

められたという断髪はその後

わが国にも伝わった。

断髪の娘親とは別に住み

旭 華

断髪の帯これ以上上げられず

夢 中

断髪の女七夫に黒を塗り

若 蛙

神経を太く断髪路地へ住み

正 次

大正十年(一九二二)ころ

には髪に鍔をあてるウエーブ

が流行しはじめた。

島田からパーマに変わり囲れる

あみ女

結び立てのパーマに袴手伝は

修 三

私共の少年の頃は赤毛や、

ち切れつけの少女をみると悪

童共がいろいろからかった

り、いじめたりしたものだ

が、敗戦後占領軍の進駐と

にもオンリーや、パンパン

など自から髪を赤く染めるもの

が目立って来、日本髪ので

姿も遠き過去のものとならん

としてゐる。

戦後の髪形については今眼

前にあるのでこの稿ではふれ

なかつた。

純合ビタミン剤

強力

パンピタン

「タケダ」

体カに

30錠・100錠

ほかにミネラル入

強力パンピタンM



月へ行く道

— 古川柳から詩川柳へ —

高 鷲 亞 鈍

7、新体詩の花園を荒して

このように新体詩は明治十年頃に萌芽をみ、二十年頃、美妙の韻文論による詩法が発表されて、一応新体詩の鼻祖といわれ、漸く近代詩の創成を思わすようになったが、明治三十年から四十年になると、二十年頃の青少年達が、日本伝統の和歌・発句の日本詩から目をそらし、当時一少年であった国木田独歩が、

— このおほかなき小冊子（新体詩抄）は草園をくだり流れる水の如く、何時の間にか小村の校舎にまで普及しかくて文学の長老たちが思いもかけぬ感化を全国の少年に及ぼした。 —

と言ったごとく、新体詩抄創成当時に影響を受けた青少年達自らによって、三十九年頃の「新体詩完成時代」が現出された。その頃、新体詩の韻律形式を、岩野泡鳴は「新体詩作法」の中で「音律総論」と題して、音数律論を発表した。これは最古の万葉集、古今集、中世歌曲、民謡の句調研究をすると共に彼は、

— 日本の詩は二音の脚、三音の脚、四

音の脚を一行中に混用するところに変化が出来ている。

— 音勢で行くものは音量を主とするものよりも身体の律動的活動に伴うことが切実で、音量を主とするのは音勢で行くものよりも、表情的節奏を利用する余地が多い。

— 七五、五七その他の句調を分解して検討した。（大江滿雄）

斯のように日本に於ても新体詩以後の近代詩は、日本の伝統詩である和歌、俳諧と全然異質な一ジャンル（ポエトリ）の詩（ポエトリ）——「新体詩抄」の作者井上巽軒たちが西歐の詩にふれた感動から漢詩にあらず歌にあらず、而して之を詩と云うは泰西のポエトリという語なり」と概念規定した。 — とみたと雖え、詩と韻律（音数律論）は不可分のものとして昭和初年まで続き、福士幸次郎の「音数律論」は岩野泡鳴の「音律論」と類似なものとされ、佐藤一英の「韻文詩抄」や外山卯三郎の「詩の形態学的序説」上下二巻などは、私も既に直接知ったところのものであった。

元米韻律（音楽用語）乃至音数律とは詩

形式に依る韻文であり、韻文作法（詩法）であったとしても、それに人間の声音を心象する手段であれば、聴覚に訴える生理的

なものであり、それは花や鳥の啼声に等しい自然発生のものであった。「詩と詩論」がポエジー詩論の樹立を図ると共に、韻律とか音数律を詩作法とした韻文を否定して散文形態を追求したのは当然であり、ポエジーは感動に非ずして、思惟するものであると黙考を強要した。

韻文必ずしも詩ではない。韻文の中にも非詩がある。散文必ずしも非詩ではない。散文に詩はある。ということは既に昨今の定説である。この場合、詩はボードレエルのように「散文詩」として捉える。春山行夫は「詩は散文に書く。」という。つまり詩を散文で書くのでなく、散文によって詩を散文文化してしまうということ。換言すれば詩という時間的なものを散文という平板な空間に植えていく（活字を）ものだといふ調である。彼はそれ故に「散文詩」という調を代え、「詩的散文」という

従って彼の詩観では、詩に内容と形式は

ない。詩にあるものは形態^{フォルム}だけであるとする。そして詩の形式とは詩のスタイルのことである。という。当時春山氏の「フォルマリズム詩論」と、中河与一の「形式主義文学論」が相剋した理由であった。春山行夫はその実験作品「白い少女」は、「白い少女」という言葉を何十行と、並べたて、いつ果てるか分らない作品構成を発表して、少女のマス・ゲムを捉えたとうそぶいたものだつた。

其処で彼は、詩作品主義・詩即韻文時代を無詩学時代。ポエジー。詩的散文の「詩」と詩論」運動を詩学時代と命名した。前者は自然発生の原始時代とし、後者は自然発生の破る主知的科学時代の技術者、とは詩人は詩のエキスパートであるという。

新体詩以後自由詩までを詩壇では近代詩と言え、昭和初期、近代詩を揚棄した「詩と詩論」以後の詩壇は現代詩である。しかし現代詩は終戦後現在に到り、詩壇は大きく変革しつつあるが、私はこれ以上詩界の現況にまで述べねばならぬ理由がない。

私は此稿の元へ戻し、再び自由律川柳とか詩性川柳に就て言及す可きだ。その頃「詩と詩論」の運動は、俳句界に飛火して萩原井泉木・日野草城などによる新興俳句の出現になり、歌壇・川柳壇の一部にさえ影響されたと言え、私の一人よがりな観察であろうか。否、川柳界は「詩と詩論」運動の影響を直接受けたというよりも、いつの場合でもそうだが謹厳な兄貴の顔色をうかがう不良少年の弟のように、新興俳句の影響を新興川柳が盗んできたと考えてよい。

それにして、俳句は勿論のこと川柳が新興川柳を提唱した必然性が私には分らない。或程、俳句も川柳も五、七、五の十七文字の音数律形式が同一であることは麻生路郎が卵の殻を外観からみた譬え通りだが、卵の殻を破って中味を吟味すれば鶏の卵か家鴨の卵かが分るように、形式は同じでも俳句と川柳の世界観の相違は歴然としてゐるものだ。まして卵の殻さえなく、龐大な壁のようなフォルムしかない現代詩観、極論すれば、それら日本伝統詩観と次元の相違する新散文詩（北川冬彦説）「詩と詩論」教冊刊行後、脱退して「詩、現実」により、安西冬衛と共に一頃短詩運動をなすにあやかることは単に詩という共通の言葉で鶴の真似をする鴉のように、本来のジャンルを濁死せしめ、やがては己が俳句とか川柳を喪失する結果になりにしないか。

故に麻生路郎氏は自由律川柳を批評して、あれは川柳でない、あっさり片づけ何事も語らないのに、さきに岸本水府は大袈裟に「本格川柳」という名の保守陣営の要塞に立籠り、詩性川柳の影をモンスタのようにおびえたことを私は笑止とする。

この事實はしかし、戦前の柳界のみを批判しているのではなく、戦後の現代にあって、なお私達はみる柳壇の現象であり、且つ俳壇の動向を察知する時、現代詩壇の常識とされる、詩、詩作、詩的行為、韻文と散文、抒情、叙事、など一連の概念規定とする廻りどころを認識しないところからくる、彼ら新興ものが如何にマヤカシ的存在であるかを私は詰りたいのである。

8、時代錯誤と「詩の原理」

一口に詩の歴史といっても、斯のように西欧精神をもつて生誕した明治初年の「新体詩」以後の近代詩と日本伝来の歌俳柳の相違は、韻文をもつて詩と規定したからといって、共に詩を論ずることは不可能である。

一般に柳界では詩性川柳を二様に解釈されてゐるもの如くである。其一は川柳の形式に詩性を需め其二は川柳の内容に詩性を加味していることである。私はいまやその二点を絞つていこうとするのであるが、先に長長と明治初期に発生した新体詩を母胎とする現代詩壇によって思考されている詩観を逐述したのを読者は想起されつつ読んでいただきたい。

そこで私は今更繰り返すまでもないが、自由律川柳を川柳とみない路郎説に同意はしても、水府のいう詩性川柳とも新興川柳とも考えられない。その論拠とする所以は、さきの現代詩論の経緯を辿っていけば明らかで、川柳が五・七・五の定型を破る必然性が見出せず、よし定型を破ったが故に詩性とみる水府の考える詩性と私の概念に持つ詩観—現代詩論である散文詩論—又は形態詩論—とは、全然縁がない。故にこの場合、川柳の形式を自由律によって詩性を附与したなどと解することは論外である。

私は最近、関西柳論の雄、「せんば」の岩本具里院と会い、柳論を戦わして、得るところがあったが、彼の川柳形式論に到り、真向から反対の立場をとらざるを得なくなつた。彼が紙上で既に発表したのを読

んだ私の知識では、川柳の五・七・五定型の持つ律格—彼の説では韻律を分けて律を強調する—を重んじ、西欧の詩にリズムのない詩はなく、リズムを持たない詩は散文である。日本詩の場合は言語の性質からいって西欧詩又は漢詩の如く韻がない。あるのは律だけであるから、川柳を詩に規定するためには五・七・五の律をとらねばならない。というのが彼の概畧の論旨である。この論旨を進めていくと、川柳はその発生理由とされる庶民の言葉、平易な口語体を棄て去り、文語体による切字を持ちいる俳句形式に倣えということになる。つまり彼が川柳にも詩語を用いることによつて、川柳を文学として昂める可く意図したのであつた。

川柳の形式に詩性を需める点に於いて、自由律川柳作家のつた態度よりは具里院説の方がやや理由があるが、私は好漢具里院が、川柳の定型を保持する古川柳の概念をそのままにして、定型律を詩語に置換して、川柳を詩とみるに急なあまり、俳句的境地に逆コースこそすれ、私の思考する「詩川柳」からはるかに遠く去つてしまつた感があり、俳句とも川柳ともどつちつかずの中性理論に陥没したと考える。ちなみに彼のいう律とは、既に先程紹介した岩野泡鳴の「音律論」福士幸次郎の「音教律論」で研究は遂げられ、文語体による詩語の廃棄は、大正中期川路柳虹の口語詩運動の頃既に論議は尽されてしまつていた。又韻律又は音数律と詩の分離は現代詩論では常識になつてゐるに拘わらず、一時代も二時代前の新体詩時代の詩観で現代川柳を論ずる詩観にみた具里院の研究不足は咎められ

てよいようだ。しかも最近三カ月に亘つて、「川柳劣等感」と題した萩原朔太郎の「詩の原理」批判は、具里院の無暴ともみる独断が多い。それは自由詩時代の最後を守り、新散文詩時代の黎明期にあつて、第一書房から上梓した初版を私は手元にもっているが、それによると昭和三年十二月十五日第一刷千七百部刊行とあり、当時から現代に到るも私達は「詩の原理」を高く評価する所以は自由主義時代に沿つて新体詩から民衆詩、自由詩時代によるおしゃべりに近い非文学的な散文時代に反抗して詩的精神を強烈に打樹てた、ある意味での文明時評であつた。その頃朔太郎のロマンチズムに傾倒していた一人、神保光太郎は「詩の原理」を評して、

——一面近代詩に対する啓蒙的な意義を持つが、それよりも、むしろ著者が生涯を通じて書きつづけた文明批評ともいふべく、近代の散文主義文化に対する詩精神の強烈な主張であり、自然主義文壇に對して、浪漫主義精神による抗議である。近代以降、散文主義文化のまゝに後退を重ねた浪漫主義精神の復活をこころみる果敢な理論の展開ともいふべく、その歴史的な意義は極めて大きい。——と朔太郎の仕事を意義づけてゐる。であるから、私達は、當時に於ても、「詩の原理」に限らず、彼の詩論集は、大正十一年に出た「新しき欲情」にしても、昭和十年の「純正詩論」だって、詩法とか詩学的研究とみず、彼の西欧精神による世界観的見地から日本文化の底にある日本古典に反撥した果敢な文明批評であつた。故に春山行夫は「詩の原理」直後「詩の研究」を厚生閣

から上梓した中には、当面の論敵を、朔太郎と「詩の原理」に及び、十年かかって考へ体系つけたという朔太郎の詩の原理自賛の逆手をとって、十年もかかって詩の常識を一步も出ない無価値な詩論とコキ降したのは、春山にしては当然かと考えられる。私はここで少し読者に誤解を受ける懸念が無くはないと、ふと思つたことは、先にも春山詩論の立場にたつて、現代詩論の極手にしている如くであつたからだ。

しかし私は春山詩論に絶対性を置いてゐるものではない。私が過去に詩壇であそんだ経験では春山詩論を反駁する場合が多く、一般論としては「詩論の正当性として一寧ろ朔太郎詩論に傾むいてゐた。或は現在もなおその立場に変わりはないと思ふ。ただ現在詩壇(詩界でない)から離れてゐても、凡そ三十年以前詩を大きく変革せしめた春山詩論は何としてもエポック・メイキングであつたと信ずるし、現代詩人の戦後派は別にして、現代詩壇の有名を誇る殆どがその洗礼を直接・間接に享けて甦生した功績は買わねばならぬと思ふ。

具里院の「詩の原理」批判から、私はかくも言わずともよい詩壇の動向を又して論述したのは全く大人げないことであるが、しかし柳界にあって「詩の原理」を正面きつて三回に亘り連載した意欲は破天荒といつてよく、「武玉川」や「柳樽」研究を又してもくり返し、落語家や漫才師や、漫画家の古川柳隣組の寄稿をとったり、批評するのが常である柳誌に掲載した岡橋宣介を一応褒めてよいと考える。

但し惜むべきは具里院が既に詩壇では評価しつつしてしまつた「詩の原理」の批判

がまるで見当違いであつたこと。其の上朔太郎から具里院の望む韻律感を引出そうとしても、樹上から魚を求める愚を敢てしてかしたということである。

9、詩の周辺

次は川柳の内容に詩性を加味したのを詩性川柳とみる今一つの見解に就て私の批判を進めていこう。

私がかつて詩を勉んだころ、どんなにしても詩の定義がつかめなかつた。詩が仲秋の月のようにはっきり視覚に入るものであれば、ソ聯の第一号月ロケットの如く実体へ突き刺すことが出来たであらう。しかし詩は、月を創り、太陽を創り、宇宙を創造した神さまの如く、眼には見えず、有るような無いようなものである。結局、神を肯定するも否定するも人間の意識の問題で、神を意識する者には神がある如く、詩を意識する者に詩があると考えるよりはかない。神は人間の意志として真善美の理念に置く。などと言つていけば宗教哲学とか神学を究めねばならず、詩の場合だつて、美学、芸術学、形而上哲学まで究めても、遂に詩を定義することは不可能である。しかも如何に人智をかたむけて神とか詩の定義を論じ得ても、神とか詩の有無を決定づけることは絶対にできない。神とか詩の存在は、その人の有りとする意識の中に顕現される。菊池寛や大宅壮一が詩を否定したり、或は神を否定してもそれは自由である。世間には、神の存在は認める。しかし神を信じない。というヘンツツがたまたま居るようであるが、それは単なる臆曲りだ。私達は神が有ると信ずる故に神を肯定するので、信

じないところに神の存在はない。と同じように私達がまず詩を意識したことは、詩の存在を肯定した。そしてそれは詩を信じたことになる。詩を信じることによって詩が判つた、という論理は余りに直截的であるかも知れない。何故なら、「われわれは神があるやらないやら判らぬままに迷つてゐる。それが人間らしいところではないか。」という人達の言を言いかえると「われわれは詩みたいにな六かしい高遠なところまで考へつかない、ただ川柳を作つてゐるうちに詩にゆきつけるだらう。」という人生観なり、川柳観をもつ求道者がいることである。或は神を信じ、詩を愛する者は殆どこの求道者であるといつてよく、真に神を信ずる者は既に凡俗でなく、基督や釈迦の如き神仏一如の教祖さまであり、詩の存在を把握し体験する詩人は一〇〇年に一人出るか出ないか判らない世紀の予言者であるかも知れない。

私達は、私自身を含めて平凡な一個の庶民であつた。そして庶民の一人として川柳を作るのであり、特定の専門の川柳家として作るのではない。全くその通りである。川柳とはその存在理由から考へても庶民一人一人の歌であり、庶民のものでなければならなかつた。

しかし川柳は、庶民の詩、生活の詩、社会の詩、人間諷刺の詩、などと既成柳人が唱へる、詩として川柳が有るのではなく、それは単なる庶民の声を十七文字に記録した散文でしかなく、おしなべて神を知らぬ無神論者の如く、詩を解せざる俗性人間の花札的、パチンコの勝負(江戸時代の運座、現在もなおお引く句会の没、入選)の具

に興する手段でしかないということであつた。私達はよし詩の存在が瞬時であるとしても、人間の生命につながる人類根源にある神とか詩を求道する求道者の立場にたつて、川柳を思考しなければならぬ。神とか詩が一部特権階級の所産であるものとするのでなく、庶民の、民衆の、大衆の側に神の恩寵を垂し、詩の美神を置かねばならなかつた。

10、言靈する詩的精神

詩作を断ち、現代詩史の研究に没頭してゐる伊藤信吉が、明確な詩の定義が下せず、現代詩における「詩」の概念規定を辛じてなす一文を左に記載しよう。

——歴史的にいえば韻律や形式に拘束されず、形骸的には散文との間に絶対的の割線がなく、内容的には散文的機能や方法とは異るといふような、ある程度あいまいな形において、しかも何らかの絶対的な強さで「詩的精神」の充満された文学形式である。

——と言つてゐる。新体詩以後の新しい詩概念の普遍性が把めず、現代詩に限つた「詩」の概念にしても、斯のように呆やけているのは已むを得ぬとしても、最後に「詩的精神」といつた言葉は取上げてよいようだ。

実存哲学からくる存在論では「有」を現定するためには「有」でないもの、「無」を仮定しなければならぬ。といった有は逆に「無」でない「有」は「無」に對立する「有」であつて「無」と共存する「有」であるから、「有」の存在は現実に存在する「有」として捉へるといつた認識論から存

在論に移した。

このような思考は現代詩観にも用いられ、「詩」という概念が掴めぬままに、では「非詩」とは何かということから、ひところ、詩の形式が韻文に規定されていたから、散文を持ち出し、散文は韻文ではない。故に詩でない。といった。しかし詩から韻文を分離し、散文に詩を追求するようになって、初めて詩の存在は形式にあるのではなく、内容に有るとし、ここに詩的なものと詩的でないものとを設定した。即ち詩的精神と散文精神である。

だが、詩的精神に非ざるものが散文精神であると規定したことは、有に非ざるものが無である無は、既に有を規定した無の有を存在づけた如く、散文精神も亦詩的精神を存在づける散文精神であると規定する。それは詩的精神の中に、詩も非詩も存在するということ。詩とか散文以前のエスプリに詩的精神の座をもったからである。

右のような詩的考察をもって川柳の内容に詩性を意識した詩性川柳作家が存在したか。以上の詩的考察を経て、詩性川柳を批判した、川柳理論家が果して、過去から現代にかけて存在したかどうか。私の僅かなしかも狭い柳界知識しか持たぬ者ではあるが、凡そ詩とか詩性を口にする柳人からはついぞこのような概念規定を教えられたことは少しもない。

私達は「詩」ということが、そのものズバリと掴まえられず、従って詩性という詩の本質が論議なされず、当らずとも遠からぬ詩的、とか詩的精神といったもので本来の詩の周辺をうろちよろしている時、詩と全然かけはなれた梅、松、桜の三個のヤクを喜

ぶ花札のように、川柳三要素を軽み、笑い、穿ち、を淫戯している既成川柳人から詩性川とはチャンチャラ可笑しいとさえ考える。

凡そ川柳三要素は、詩的精神からほど遠いものはない。しかし軽みをフランク、笑いをユーモア、穿ちをシニカルと英語に直訳してその英語を和訳したら、それらは凡て精神に還元される。ということは西歐的精神をもって川柳三要素を取上げるとするなら、三要素は庶民が川柳に面白可笑しく余興、茶番に組みあわせるものでなく、詩的精神につながる内容的な意味をもつからである。換言すれば三要素こそは古川柳が江戸時代に存在した、存在理由であり、庶民が川柳に遊ぶ三筋の線り糸であったことは、此度びの私が起稿した冒頭に於て、吉田精一の「川柳の本質」に触れたところで説者は了解したのであろう。而もなお現代川柳界では、その三要素を、或はその一要素を川柳を規定する金科玉条とし、川柳する方法として三要素を取上げる。即ち彼らは詩的精神という内容に於て三要素を押し出さず、庶民一人一人の限定された横と横との対立、確執、相剋が個我的私情によって揚げつらう見にくい皮相感によって、愚にもつかぬ川柳を支えている井戸端会議の記録でしかなかった。

11、三要素と詩川柳

しかし私達は最早このような卑猥な川柳的現実にはアキアキしている筈であった。中には川柳とはそれでよいのだと不逞き者があつたとすれば、バチンコや花札も人生にあつてよいものだ。極言すれば、女郎屋も、賭博屋もあつて可いものだ、とい

た人間として生れ、生れた人生を思考するパスカルの考える人間としての特権を放棄した浮遊的無自覚的動物本能の人間獣皮の輩であつて、神とか詩を語るに縁なき衆生である。よし私達は、虚無につかれ、享樂を謳歌すること無きにもあらずである。それは結局、己が自我を考え、主体としての個を拡充する思想として捉えた限りは西歐精神のもつロマンチズムである。

一体日本文化というか、日本古典として現代にも残存する芸術は、文学、劇、音楽、絵画など何れもその国民性からいって凡て直感によって捉えたもので、時間芸術としては瞬間的であり、空間芸術の場合も「点」として位置を与えるだけの極限の場が与えられている。日本芸術の極致とは時空を超越するところにあるとさえ言われている。そこにダイナミックな生命感はなく、龍大に拡充する自我意識がない。あるものは生者必滅会者定離の無常観である。芭蕉以来の俳句観がそれであり、川柳も亦それに近い無常感が根底に無しとは考えられぬ。しかし比較論として俳句と川柳を比べたら、川柳は俳句の如く直感によって捉えるものでなく、弁証法的に捉えるものだ。俳句は文学思潮からいえば、全然動きのないサムボリズムであり、川柳は多少でも身振りを持つものであればロマンチズムの流れに漂う俳句のようなものといつてもよい。

直感とか象徴が日本的な詩観とすれば、弁証法的感情と浪漫性は西歐精神のものでなければならず、その意味で、日本古典の中では川柳はロマンである。私は今、俳句と川柳を世界文学の思潮に

のせて余りに大袈裟な区別をしたことに気が付き、いささか持てあまし気味である。しかし日本の芸術が、現代に古典を生かすに急のあまり伝統を追うことは、世界文学史から放逐される。今は小さく川柳一つを取上げて私は語るべきであったが、悲しいかな日本の文学としてさえ位置づけられない私達の川柳が、ここで川柳を井戸端会議に規定したまま、何がロマンチズムであるかと言いたい。

私達は川柳が横に拡がるバルザック的な一大ロマン小説の性質をもつ散文でありながら、最短の場を好む日本民族の故に川柳は限定された空間(散文句、記録)へ縦に貫く時間にロマンチズムを生かさねばならない。それは取りも直さず詩的精神を川柳に盛るということであり、庶民がバラバラに抱く無思想な三要素にかかずりあうことなく、高く広い俯瞰的立場をとる詩人の眼をもつべきだと考える。但し詩的精神を持って、詩人の眼をもつてというのは、庶民は庶民のままで詩的精神を求道する詩人的自覚を要請することに他ならない。私たちが基督を信じ、神に仕えるクリスチャン(求道者)を観るように。

斯くて私は川柳の内容に詩性を加えることの不可能は、川柳の形式に詩性を需める不可能と同様に解明した。川柳が川柳のまま、換言すれば、川柳三要素を放逐せずして詩性があり得るものでない。もともと詩性という概念規定が、本場の詩壇でさえ曖昧であるのに、川柳家が詩性を概念規定したことを知らぬ私は、詩性川柳とは片腹痛い言葉である。と寧ろ反感こそ覚える。

さて私が考えたことは「詩的精神」といふ現代詩界で口にする言葉を、柳界に言霊する。その詩的精神とは西歐精神であり、直感でない弁証法的ダイナミックなロマンチズムであるということ。この詩的精神を川柳に盛るためには、川柳が庶民の言葉の記録であるというギリギリ結着のところまで乾しあげる。川柳にあった従来の柳味と称する三要素を放逐しなければならぬこと。それは塩から塩の辛味を無くして塩の存在理由がない如く、川柳から柳味をとり

作州の武蔵と

吉川英治の川柳

津田 麦太 楼



津山線弓削駅前に、路郎先生の「俺れに似よおれに似るなと子を思ひ」の句碑がある。

作州弓削町、今の久米南町は、全国的に稀れな川柳町として文化の花を咲かせた。われ等の恩師路郎師が身を入れての指導があつてこそ実現した川柳町であつた。今は、当時のおもかげもなく、恩師の句碑と、七面山氏の孤軍奮闘とがあるのみ。不朽洞に席をおいて親しく師の御指導を享けているものには洵に淋しい極みである。先生の息吹がかかり御鞭撻があつたからこそ川柳町は生れたので、じつと考えていると残念限らないことである。

さればあとに残るのは単なる散文である。その散文は小説的な横の拡がりを持つ空間的な場であるが、それを私は日本民族性から捉えて空間の場を最少に限定する。而して縦に貫く時間的な詩的精神を樹立すべきこと。

以上に要約したことは、既に私の提唱する詩川柳の概念規定に他ならない。故に詩川柳とは詩的精神をもった十七文字散文句であるということ。その詩的精神はロマンチズムであり、而もリアリズムを設定し

さて、話しは飛躍するが、作州には無敵の劍豪、宮本武蔵を出した。作家吉川氏の武蔵に夢声の語術は大衆を沸かした。次いで新・平家、私本太平記を愛読しているが、大衆作家の王座を占むる吉川氏の作に接して居って、氏の苦勞人としての片鱗をうかがい得るので、ふと、氏の曾つての川柳作家としての當時を偲び、氏の川柳作品を物色して見た。

私は、若かりし頃、柳書を相当蒐めていたのであるが、その殆んどを逸失した。今、二三冊手許にあるものを見るに、句集の前後が破損して何年の刊か、誰の編かははっきり分らない。

た詩的精神。散文句は十七文字に限定された散文の謂。散文とは韻文でないものであり、詩と対照される小説的拡がりをもつもの。十七文字に限定したことは日本民族の生理的具體的存在である庶民の一呼吸であるからだとする。

遂に私は懸案とする現代川柳を批判しつつ、私の詩川柳理論を纏めて発表する機会をもった。

このように私の詩川柳は、吉川柳にも、新、古川柳にも、進歩、保守川柳にもない

柳号「雉子郎」吉川英治氏の柳句を三十句ばかり得た。この句集には路郎先生を始め三太郎、雀郎、水府、紋太の諸氏の外、既に物故された著名川柳家の作品が集められている。この外、私の知らない多数の雉子郎作があるかも知れないが、私の手許では、やっとこれだけ集め得た。

吉川氏の小説を読まれる方々に何かの参考になりはしないか、多少でも参考になるとすれば幸甚である。

雉子郎作品抄

姉が羨まし妹が羨やまし
いかづちに刹那の恋の火よあぶな
年下の男と住んで赤き紐
貧しきも余りの果は笑ひ合ひ
書置のやうな心で何故不幸
茶筆筒をおそく帰って調べてる
柳原涙の痕や酒の汚染
差押へ油の切れてゐる時計
水髪の眞に熱い頬をつけ

概念規定をもった詩川柳であつた。しかし私はいつも言う通り、柳論は作品のあとに喰いついていく花嫁に等しい。それでは詩川柳の花嫁は？と読者は問うであらう。他でもないそれは麻生路郎と、その作品にあつた。私は其処で稿を更め、一九六〇年の新玉を迎えて、現代川柳の座標たる可き花婿の跡を追従するため詩川柳を活潑に展開することを約束したい。

(一九五九、九、二七)

袖抱いて寝る清玄に春の鐘
蟹の穴ほど待合のある小路
陳列を女工朝夕見て通り
土佐衛門あやめ踊の笛の昼
高台の二階に昼の蠍が見え
真ん中を歩く都の午前二時
打ち込んであるやうに星止つてる
よごれずにあれ一月一日町はさん
らん
生きやうか死なうか生きよ春臘ろ
水盤の小さき波に夏の色
風鈴の房水色がちと汚れ
なほ愚なる我となさしむ夏一日
船長の世帯が見える川蒸汽
巡繰りの塔婆で寺の風呂が沸き
神代の杉は末世の女下駄
この先を考へてゐる豆の蔓
兵隊と女が赤い汽車と汽車
満員車足袋の間を蚤が喰ひ
電線の燕唱歌の本のやう
丹鳥は人と話がしたい顔

蝙蝠を掴んで馬鹿は驚かせ
日本橋に頑張ってゐる馬の糞

放浪の破れ帽子を山羊にやる
化鱖陸を泳いで逃げるなり

放送対談とぼれ話

前田 伍 健



民放の南海A.P.局から毎週土曜日午後四時から三十分間既に八十回回続けている私関係の放送でお相手は県の副知事大学教授からおおでんやのオッサン、料理屋の女将、お寺さん神主さん女学生小学生と男が出たら次ぎは女が出る番組で各種各様の人々が出て居る、その中でこぼれ話を拾って見ようO.婦人との愛情か金か肉体(セックス)かの対談にこのご婦人ずばりと云うお方でわたしを怒らしてから主人はたのしむ趣味があるから話は放送出来ぬ点へ外すれ一寸軌道へ戻すのに冷汗をかかせられた、然し人間性がよく出て飾り気のないことは共鳴を得て成功でした。又釣りの話で松山地方は海に川に恵まれており近頃釣れぬ原因は道路工事に手近かの海から岩や石を採り使用するので小魚が寄り付かなくなった話であり、魚釣(竿釣)と道路工事のつながりを合点させたり、夜釣に出て夜半に船のぐりりが青く気味わるく光りスツ海坊主か幽霊かと驚いていたが、それはイカの大群で船の水柱で突き大漁した話など又在学の女学生がいとも鮮やかに恋愛や結婚の理想を語って今時の娘はと私をたじさせた

が、その後卒業してある都市へ就職し社長のお供でゴルフ場へ晩めしから温泉宿へそしてお定まりのあっさり純潔を消され今は二号さんに納まり木妻さんにとらみあいの理想と現実浮世の風の後日談を手紙で知った事もあった。それから夜泣きうどん屋のオッサンがただで食われる合理的食い逃げの権のない不甲斐なさをガイタンする一席もあり、ミスユニバースの第三位に入ったお嬢さんと対談の折にこのお嬢さんつぼみが固くどう水に向けても「ハイ」「イーエ」「そうです」のお答えにこちらがじりじりさせられて、あたら三十分間をこちらばかり喋った大汗の巻もあり、国鉄のお忘れ物係との話では、人間さんのウッカささ笑うに笑えぬ話もあった。夏は特に旧盆頃は怪談流行で禅僧も真言宗の僧も松山〇〇会長とそれぞれ対談したが、やっぱり宗教家より素人との対談が拍手好評をうけた。会長は岐阜県飛騨高山のお生れで松山へは何十年の水住立派なお店の主人であるいろいろの肩書もどっきり持っておられる、この対談には遠くで貞山の講談お岩さんの出

生を聞かせて本筋に入ったりお岩さんの話に戻ったりしつづつ話を進めた勿論例のボーンの鐘の音も雨の音もドロドロ鳴り物入りで一寸大仕掛けであった、以下私はと言うのは会長自身である「私が九つか十才の頃でしたご承知の飛騨は雪国で、永らく病臥して居た兄が亡くなって、それを知らせに小一里離れた祖母の宅へ行くことになった雪くつに小提灯頭からネルの襟巻で包みトポトポ歩いて半分程来た時に吹雪で目の先が見えぬようになった、心細くおそろしく泣き出しそうになった時フト目の前に白い雪より一層白いものが立って招いているように思い、「ハテ兄じゃ」とかゾーッとじたがついて歩いた、その影のようなものが祖母の家へすうと消え込んだ、私は恐ろしさとやうと目的の家へ着いたうれしきで「おばあさん」と呼ぶと「おおM坊か、兄やの死んだのを知らせに来たのかや」「おばあさん兄やの死んだのをどうして」「今兄やが来てのう」これはうそいつわりのない実話です私がこの目で見たのですからと語る会長さんの唇のいろが変って居た。以上のような対談もやった。陰気な話はこれ位にして、大工さんは酒が強くなるわけの一級建築士の談です。地鎮祭、仕事始め、棟上げ落成式と一軒建てると、何んの彼のと再三飲める従って酒量は上昇する、芸も習ったり覚えたりすると云うわけ、それから曲尺や、墨壺は日本自慢のもので、墨壺は直線でも曲線でも自由にやれると一人前だと語った。こんな話、あんな話は八十回八十余名それぞれにきくのだから、話の種はつきない。マダムの海千山千から見た今の

青年のきいた風の遊びぶりから、ダンスの誘わくあの手この手など、川柳の人間生活社会諷刺にある通りの実体実様である。氣象台長との対談に「本日は晴れ後曇りところによつては雨があるかも知れない」の予報に、あれなら素人でもやれるのじゃないかと、たずねると「それが、むつかしいのです、あの答えを出すのも相当材料と苦心があるとお答え」又猫とか魚とか鳥とかで天気を知るわけは五十パーセント当ると云い、遠足、野球などの関係で問合せがあると困る、中には野球中止して後で晴れ(又は降る)と損害を保証し弁償してくれるかには弱ると所長いや台長さんの苦心ぶりも対談中であつた。その他、すし屋の江戸前は何故、出前の高足駄のわけなど、話はつきない。孤島の女先生と話した時など、その島の生徒さんから局の人から、大きな反響があつたなどは、うれしくさせられたものである。

品質優良

先カワペン

TACHIKAWA PEN

大蔵省東区警署町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙



試歩の汗あらたな希望湧いてくる	貝塚市	杉本 一鶴	百姓の客牛小屋をまず覗き	今治市	越智 一水
目かくしをされて嬉しい声を出し	同	同	鎌も新らはりこんで刈る稲の出来	同	同
蟻の列横着なのが脇へそれ	同	同	逢いに行くリボンをもに結ばせる	同	同
お通夜へお泣きなさいと雨も降り	同	同	救援物資に押入れが整理され	西宮市	三上 笑路
酒屋へ叛き菜屋と親しゆなり	愛媛縣	鳥井 川鳥	テレビで順番狂う祖母の風呂	同	同
花売りの商魂 仏を拜んだり	同	同	虫の音に浴槽の灯を消して聞き	同	同
歳暮かと思えば貸せと十二月	同	同	あの人も長くないと見舞に來	貝塚市	田中 千鶴
運不運屠所と展示へ分けて牛	同	同	電建の写真へ夢を持つベッド	(須賀)	同
雨降りの町の奇遇を酒にする	西宮市	山本 一傘	お豆腐をグチャグチャにとすもる気	同	同
清廉・潔白・孤高甲斐性なし	同	同	クリームで三面鏡を当てるとか	堺市	沢田 美喜
あなたが来ては断われまゝ寄附帳	同	同	時計進んでる分まで惜しみなく遊び	同	同
すぐ唄が出る日の仕事はかがゆき	同	同	倦怠期髪でも赤く染めましよう	同	同
世間には疎く澄んでるきれいな眼	大阪府	井上美恵子	退職金貰うて保守になりかかり	宇部市	平田 実男
人生はそんなもんさと割切られ	同	同	空瓶を数えて幹事唄にする	同	同
死火山のような女も疑われ	同	同	道標が欲しい四十の曲り角	同	同
他人様の云う倅せが受けられず	同	同	おにぎりを喰べにネオンの灯をとり	大和五条市	尾来 絵見
禁酒させた胃病が用捨なく痛み	玉野市	小谷 仙山	一円で白髪を抜かず日向ほこ	同	同
正直より嘘に此の場を助けられ	同	同	それぞれに噂持ち寄る編物機	同	同
大物を逃がして釣師自慢する	同	同	声がわりしてもぎはし要るオヤツ	竹原市	山内 静水
相槌の仲々骨の折れる事	同	同	且はんと呼んでもろうた旅の宿	同	同
打ち死のように孫等のいい寝相	竹原市	松井 可笑	ゴルフ場憎しみ芝生の美しく	同	同
養老院浮世はなれた喧嘩もし	同	同	外務員我が半身とする靴	岸和田市	田端くにを
湯の町の散歩へ楽しエロ玩具	同	同	無量寺の灸を勧める外務員	同	同
テレビ買う隣の生活不思議がり	同	同			

破 戒

園にて昼食する予定通りに運ばれて、先達の命令はよく聞いて、弁当散らかさねば、バスへ集合時刻十分前には、全員車中の人となって居る安全でした。

餌をくれる爺々姿々好きで鯉が集り

俺よりも歳よりの松背が低い等と年寄頑固の会話から生産る川柳味にはほえましい。

宇高經由船中にも小学児童の如く、皆が船中椅子に座して、船窓よりカメラ、シャッターを切る者、船に群がる千鳥を五六羽でも連れ帰りたいだの、隣席の子供をあやして菓子を与えて、孫に似ると、早やくも里心を出した者等々の愉快さは格別である。

一時間余りにて、静かに、宇野棧橋に着いて居た。自動車も取けずに、フェリーボートで、荷物満

ヒゲそり後に…

●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン

配合

男性 200円

ASTOR



偏見に揺がぬ愛を今ぞ知る

同 土守 蜻蛉

賞金はもらわぬうちに足しがいる

同 坂東 若芽

案山子では防ぎ切れない暴風と滋賀県

同 板倉天悟空

行く当てもないのにおし布巻市やれるも秋

同 河原みのる

テレビ今天外妻も呼んでやり

同 板倉天悟空

台風へ黙って花は散っている

同 河原みのる

ひとごとのように思えぬとは女

同 板倉天悟空

名古屋水害に思う

同 河原みのる

希望給を言えと採用試験なり長野県

同 板倉天悟空

昨日まで仕合わせだっただろうのに

同 河原みのる

童顔になって社長の小唄が出

同 板倉天悟空

大いなるプラスでしたと拘ら兵庫県米

同 河原みのる

野良犬も乞食の帽子のぞいてる

同 松高 秀峰

死に順が寺で十指に迫って来

同 河原みのる

夢の様な話へ母が真面目すぎ七尾市

同 松高 秀峰

村議会選挙

同 河原みのる

警官の採用試験も亦だぶり

同 松高 秀峰

御同情申す理由の見付からず

同 河原みのる

トランジスター月賦が終た音に

同 松高 秀峰

線路の音の遠さが秋を感じさせ京都市

同 河原みのる

夕刊の下に税務署から葉書石川縣

同 松高 秀峰

尾上の空までデパート儲けてい

同 河原みのる

定期入うっかり写真見せて降り

同 松高 秀峰

花の名も鳥の名もドイツ族には要らぬもの

同 河原みのる

簡素化に同感しながら嫁さおくれ

同 松高 秀峰

編棒ウキウキ文鳥へ話かけ貝塚市

同 河原みのる

誕生日笑わず役のいるシヤッター見島市

同 松高 秀峰

経済欄にも通じ療養暇がなし

同 河原みのる

働らけるねち鉢巻をぐつとしめ

同 松高 秀峰

流行の服は人形に着せるだけ

同 河原みのる

一坪の庭へ隣の鎌を借り

同 松高 秀峰

旅馴れた座席は海の見える窓和歌山縣

同 河原みのる

鏡台へ土間から女将身繕ろい田辺市

同 松高 秀峰

ビール瓶で囲む秋の花鳥

同 河原みのる

窓からの帽子の主が席へ来る

同 松高 秀峰

喝采は音痴のボスのかくし芸

同 河原みのる

落ちついていられるは持つているからさ

同 松高 秀峰

あばれ神輿寄附のすくないことを知り大阪市

同 河原みのる

焼香をしてくる女に見とれてい鳥取県

同 松高 秀峰

盛塩もカンバンと云う疲れよう

同 河原みのる

もの好きな奴と他人の恋を言い

同 松高 秀峰

暗黒へトランジスターだけ喋り

同 河原みのる

立板に水だがしかし金がない

同 松高 秀峰

スラックス行儀の悪い足であり松江市

同 河原みのる

災害のテレビヘリコナドばかり飛び愛媛県

同 松高 秀峰

ほっかりと心へ穴をあけて逝き

同 河原みのる

載のトラックと相乗りして渡って来る。

四国地の土を車輪に付けて来る

岡山も過ぎて、鳥取県へ進んで居る、一時間もすると宵暗を利用して、用達しに車は止る。通行の人に、ここは久米南町では有りませんか、と尋ねると四国の自動車のお客さんが、えらいくわしいが、若し川柳にお趣味がお有りですか、それなら、南町も御存じでしょう。先日の西日本川柳大会には、愛媛県より、大先生が二人来られました。とは今治市長野文庫、中川焼二両氏が、参加されたことでした。

残念乍ら南町より、北進、津山近くでした。が川柳の余香、鼻に残るようでした。

津山も過ぎ、奥津温泉の情調なごやかも窓越しに入浴風景も見えました。

入浴に付いては、文章の前後が有るが、翌日三十日の夜、一畑葉師の聖浄地の、玉清館に落付いての入浴は先ず、一番に御出家からと中川頼法和尚から、三人五人と引続いて、自動車の世話役連に婦人達であり、玉清館は千五百人の宿泊能力へ今夕は、四十人ばかりで昨夜車中泊で、温泉地帯の風呂は又格別で、何人の口よりも好かった。さっぱりしたの連続なのに、自動車世話課の五藤さんは、裸で風呂場へ行つたかと思うとす



図書館でつわものどもの眠り顔	奈良県 奈良市	浅井 信順	呼鈴に馴れて村医者よく眠り	笠岡市	佐内 隆文
大学を出て劇団の馬の足	山口県 山口市	藤本 星二	仲の良い夫婦と言えば叱られる	笠岡市	山部 泰山
母逝つて母の匂いが残る部屋	玉島市	井上 旭峯	嫁姑あんなする手に血が通い	愛媛県 愛媛市	古川 虎和
旅帰りやれやれ家が見えはじめ	香吉市	奥谷 弘朗	スポーツランド小銭がみみ出てる	西宮市	山岡 半歩
松茸のはしり怖わごわ怖をたずね	京都府 京都市	大久保 和三部	親の子じやないぜ案外いかす顔	鳥取市 鳥取市	近藤 昭夫
惚れてるとどっちも言や年を越し	大阪府 大阪府	三栗 夜城	猫さえもままに飼えない姑が居	枚方市 枚方市	西浜 青路
幸福は蚊帳の中から月ながめ	西宮市 西宮市	酒井 丹謡	ひま人はマネキンガールに化粧	東大阪市 東大阪市	森崎信太郎
栓抜きが待てず奥歯で若さ見せ	神戸市 神戸市	吉田 隆史	コンクール土のう積み賞を出し	大阪府 大阪府	萬代句念坊
自動車を馬鹿にしたよう鳩は飛び	シスコ市 西宮市	児玉 不村	台風へ叙勲のように名を贈り	伊丹市 伊丹市	西沢 堅持
唇の赤さに齡がはかりかね	西宮市 西宮市	村上 球絵	豊年祭案山子に着せた五ツ紋	笠岡市 笠岡市	谷本鈍愚坊
三女までまわり晴着もくたびれる	大東市 大東市	齋藤 さかえ	丹前を着眼れ温泉から女子社員	鳥取県 鳥取市	亀崎 漫歩
膝の子も背の子も眠り疲れ知る	石川縣 石川縣	齋藤 巖	浮世ばなれの滝のしぶき受て行き	河内長野市 河内長野市	森本黒天子
大掃除ババの便所の長いこと	布施市 布施市	塩田 科山	上品な茶菓子へ足がしびれて来	宇部市 宇部市	神田 豊年
栄転へ土地に居たいと世辞を云い	愛媛縣 愛媛縣	和氣 久義	低恩給へ触れてくれない人事院	笠岡市 笠岡市	高木 洪柿
肩書を持った女房で内に居ず	大阪市 大阪市	種谷 敏明	金借って貯金秘訣の本を買い	大阪市 大阪市	中西兼治郎
エチケツトエチケツトミ食べ終り	小松市 小松市	筒井 吉枝	味噌漬けの西瓜の味に妻は老け	羽島野市 羽島野市	井阪東天紅
口笛の呼吸して海女は又もぐり	大阪市 大阪市	本村 文福	赤い羽根つければ広い街の中	松江市 松江市	小林孤呂二
年寄りの日だけ押しがマッサージ	茨木市 茨木市	高木繁太郎	失業の子の空気銃たしかなり	山口市 山口市	樋村 天流
辻占に迷う古さも持つており	松江市 松江市	田中 妖人	おいと呼びなれて愛情疑わず	京都市 京都市	仲上 蘇水
社長訓示 皆慢性の顔の色	笠岡市 笠岡市	松本 忠三	秋の雨囚人点呼とっている	神戸市 神戸市	室田 千尋
産児制限までして家を建て	小松市 小松市	月田北海坊	テレビ普及亭主靴下孔のまま	奈良縣 奈良縣	木村よしを
同情も数多すぎる羽根をつけ	京都府 京都府	塚脇 笑太	かつがれた思いで披露宴にも出	大阪府 大阪府	北野 水楓
花嫁の修業卒えたに迎え来ず	八代市 八代市	永松 道雄	カレンダーはがしてわびし秋の暮	大阪府 大阪府	稲森けい女
反省の扉をしめて立上り	布施市 布施市	久米奈良子	住宅の建つ山科の開けよう	大阪府 大阪府	半田 夏生
欠伸をばされても続ける親のぐち	大阪府 大阪府	石田 新石	結婚して磊落さに輪をかける	大阪府 大阪府	長谷川兎風

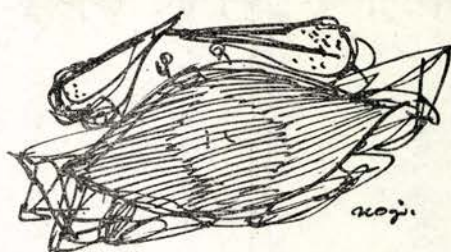
こりと痛みに
サロンパス

久光兄弟株式会社
 東京・佐賀・大阪

八月号の川柳塔の頁を開くと勝浦にて何々風景、大阪にてまで十三行程、川柳の前置が本欄の記事を塞いでいる。前置が無いとしくりその句の意味がわからぬなら字余りとは違ふ句外の説明と云えよう。私はかつて山口県厚狭に勤務したことがある。笠岡駅で切符を求めると若い出札係が「ハハアンアツサカ」と言つて売つてくれた。アサとは読みづらいためであらう、とまれ十三行の中には厚狭駅改築新田駅舎と入念なことわり書きがあるが然し特にこう説明を要する恋の厚狭駅であろうかも知れぬ。いらぬ世話である。一句しか載らぬ川柳書き送る。

近作柳樽の投句者から見れば、紙面を説明で潰す勿体なさが感じられる。

(国弘半休氏へ妄言多謝)



十二月

うれし風も

少し吹け (路郎)

師生の京の顔見世と歌ったわけではないが、編集局オールド出演で十二月のフットロコ工合を紙の舞台で披露したが、いずれも札幌の花道には程遠いようである。

春 巢

春の来ぬ先きに畳だけは春になっております。かくて旦々と冬の短い日が暮れ、旦々と年が暮れて行くのです。

○

戸田古方

世話すきの師走ドブ板ふみはずし

という句を何年前につくったことがありましたが、これは私のことではありません。

こどものときからカタ門徒の家で育ったものですから、年中行事もいたって、消極的、年末、年始といつてもあまり何も感じません。

スカミたいなものです。商売をしている時分でも、問屋でしたから、三十一日は早仕舞、大晦日に夜通しするとか、掛取りをするとかも知りませんし、商売からはなれてしもた今日はなおのことです。

二十五日頃から休暇に入りまして、何をさしてもドンクサイのも彼女まかせ。正月用のセリを買って、やらされて、大阪中をさがして、とうとうナンバ駅に近い黒門市場で、とうとみつけたたり、娘を連れて三十一日にサーカスを見にいったり、そうでなければ相変らず本を読んだり、物をかきつづける年末であり、年始なのです。

せつかくのアンケートでありまして、これも数のうちですか。こどもの時分に年末から温泉行をしたり、正月になって、温泉宿

からの年賀状で急に思いついたので、正月四日に、店まで金とお酒をとりにいって正月七日頃まで居続けました。

こどもの頃にはよくお年玉をもらいました。それで暮がまたれました。この年になれば誰もお年玉をくれません。ことに満年齢になって一つ年をとった感じもしません。めでたいとも思いません。

それでも正月にならないと正月気分が出ないせいたくさが、年賀状は年末にかいたことがありません。正月になってからかきますのでどなたにも先をこされて申訳けなく思っています。

何しろ思うままにふるまって、誰が何んといつても自分の思うようにしかなない気儘のもの、皆がやいやいやいたら、無理にもおちつきたくなります。今年の年末年始、せめて、一年に一度、年末年始に、こんなかたくなを反省してみたいとも思っています。これがしてみくららしい私の年末でしょうか。

○

清水白柳

大三十日近所へ義理で暮を休みがあるがこの「暮を休み」の句は、講語の「ひまな客」の換骨脱

北川春巢

この間もある必要があって「テレビ」の句を雑誌から拾っていて思ったのですが、どうも川柳家というものは、自分が貧乏がって楽しんでる、という感じがするのです。テレビが自分の家にあるのも、ないような表現をします。例えば

情なきテレビ乞食に行く子供
ひか平

という具合です。よその子供が自分の家へ「テレビ乞食」に来た場合でも、そうは云わずに、自分の子供がよそへ行くように詠むのです。また

ヒタヒタとテレビの波が押寄せる
村颯子

という句もあります。自分の家に

買ってよ!

だけテレビがないような表現です。川柳が庶民の詩なるが故に、こういう表現をしないと感じが出ないのでありましょうか。

十二月と云えば、金策等に忙がしく、寸時もじっとしておれない、ということが真つ先きに頭に浮んで来ます。これは一般感情で、句にもそんな句が多いようです。しかし路郎先生のこの句には

「十二月」のそんな感じが少しもありません。いかにも春風駘蕩といたった感じが溢れておます。木枯を春風に変える力を持っているとも云えます。その点一般の常識を逆に行って成功した句だと云えると思います。

おっと私はこの句を批評するためにペンを取ったのでありませんでした。私の家の「十二月」を書くように命ぜられていたのです。

私の家の「十二月」はごく平凡なものです。借金取りに攻められるというでもなく、集金に走り廻るでもなく、そうかといつて貯金月と大して変わった所はありません

「お父ちゃん、今年はお金を

買つてよ!

木枯が吹き荒れる前に、長女からのこんなおねだりが私をゾッとさせます。

「よっしゃ、よっしゃ、ボーナスでも貰えたらな。」私は答えません。忘れていましたが、今月はボーナスという平生にないものがあります。

「僕、今年には革靴が欲しい。」高校生の長男の春を待つ言葉です。

「よっしゃ、ボーナスで買ってやろう」
妻はみんなの下着の一揃えぐらいは正月用に買っておきたい、と十二月にはいるや否やの申込みです。「ボーナス貰うてからやで!」
ボーナスはオール予約の十二月
春 巢
こんな句ができました。いくつ貰えるかも分らぬボーナスに全部予約ができてしまうことは、淋しくもありまた楽しいものです。
家は公舎にいますおかげで、正月前には畳も時には襦も新しく取り替えてくれます。
畳替え終り公舎も春になり

大三十日隙な内へはひまな客
素 太

この句は安永七年の「猿つくる集」という講語句集にのっている句の一つである。(川柳探究、雀郎著による) 柳多留の中でよく例にひく句に

大三十日近所へ義理で暮を休みがあるがこの「暮を休み」の句は、講語の「ひまな客」の換骨脱

体と思われほどであるが、表現にも、感じ方にも格段の差があるように感じられる。つまり誹諧の方が佳いと思うのであるがこう感じるのは私だけかも知れない。うがちに對する一つの感じ方を示しているといえると思う。さて年末のやりくりだが、いつも追われてばかりいて、年末はどんづまりだから、何も作れなかったのか私の句は一寸見当らない。

直角に質屋の門に折れ込んだ
豆 秋

あえて年末でなくても、私は時折折れこまねばならぬ時があるのだが、その門が電車通りであるので、危くて仕方がないのである。以前のように商売をしていた時は、年末になると、少々はへそくりをして、わからない程忙しかつたものだが、この三年程というものには働いているので、一日休めばそれだけ収入がへるのだから、普通の月より年末の方がつらいわけである。ポーナスとか手当などというものもないのだから、義理のある届けものをするだけでも普通の月より支出がふえる。ましてお餅でもつくとなれば、いきおい折れこむ回数が多くなるのも止むを得ない次第である。正月用の自分の小遣いの中から、子供達へ、たとえ百円ずつでもお年玉をやると思うと、段々正月の小遣いがへってゆくので、正月は寝ているより仕方がない、というのが、わがささやかなる年末やりくり風景である。

元旦の初発疲れたのも交り

ポーナスはゼロ

丸尾潮花

十二月財布の口はあいたまま
ま

今年のポーナスはどの位出るんでっしょ。この言葉は毎年十二月を聞く決った様に妻の口から出て来る言葉である。私達サラリーマンの悲哀は支給額の多少にかかわらず、貰っただけで借金取りは来ないにしても出費の多い十二月を送って新しい年を迎えなければならぬものがある。妻の言葉も無理からぬものがある。交際が多ければ多い程義理にからんだ出費が多くなって来る。ポーナスの支給額が決まるとその年のお歳暮の額をきめる、そして一軒一軒ノットして行くと、年々増えて来ていることがハッキリとわかる。増えることは金額がはみ出すことになるので額を下げる訳にも行かず自然廻し屋も余儀なくなつて来る。〇〇さんから届いたらあそこへ廻して思つてののにまだ来やしまへんねんとは実に淋しい言葉である。どうにか歳暮の型がつくと正月を迎えるための仕度金である。これがなかなか馬鹿にならぬのに男性たる人間はおどろかさされる。しかし女性にとつてはそれが子供の様に楽しいのかも知れないと思う。安物でも一枚買って、おにしめを作つて、二人切りの膳に呑まない二合瓶でも置いて新しい年を迎えることが、男性にとつ

ては折角貰つて来たポーナスが飛んで出てしまふことはヘナヘナと坐つてしまふたくなるほど淋しい。しかしポーナスのなかにには恋の予算も入れてポケットマネーを見積つていることだけがせめてもの慰めでもある。と思えばあきらめはつく。しかしポーナスは完全なゼロであることには間違いない。宝くじでも当たらない限りはサラリーマンの十二月は味気ないものである。もつと余計ポーナスを買える会社で務めていたらと毎年思うことであるが、全々そうしたもの出ない人達のことを思うと有難い限りかも知れない。十二月やりくり帖、ポーナスの三割強が世間さまへの御義理四割弱がお正月への仕度二割が私のおこづかい一割が愛人へのささやかなるおくりもの、これで完全出費。お歳暮にはあの一とに何を買おたげやありますねん、私が見立てたげましようか。とは優しいようで金額確認と云うものがひそんでいる。本人のいいものにしたらと、云えば、金額はどれ位予算したはりますの、と云う。いやはや十二月は八方ふさがりの型である。やりくり帖を眺めて、せめてポーナスの税金だけは引かんと呉れたらなあ、とは夫婦の溜息。

やりくり世帯

真鍋 一瓢

十二月うれしい風も少し吹け

どうも吹きませぬね、既に人生五十、四十台へおさらばした私の現在にも過去にも。そう恋の皮のつつ張つた方じゃないと自認しているんだが。十二月を僅かに潤おすポーナスでは、家内中の重大欠乏を補足すれば、私に及ぶまでには新しい足袋の一足位が関の山で残念乍ら全額消化される。私がこれ考えようで、私は別に嫌だとか苦しいとかは思っていない。十二月と云う一年最後の月があるお蔭で私の足袋一足でも新しくなるので仮りにするずるべつたり三月四月と進むようなら、私の足袋はまだ家内の手につづくられたいたかも知れない。私の考え方だと十二月に感謝した方がよいのじゃないか知ら、借金も毎月払える程度にしか貸手がないからしたくても出来ないし、ほんの些細な借りでも貸した方は減多に忘れないものらしい。十二月に財布の底の大掃除される事だけは確実であるので、また来年から張り切り切ろうぜと云うふん張りが出て来るので、私の体の方もいつも達者で居れるんだと思う。落ち付いて病んでも居れぬ借りがあ

一瓢
平素からがたがたのやり

ビールは
アサヒ
ゴールド

くり世帯をやって居れば、病気の方でもいたたまれなくなるんじゃないかと思う。だから私の内やりくりは十二月に限つた事ではなく、一月の末から十二月まで兎角月給前数日に世間一般の人が感じる師走の風が吹き荒れているので多分に免疫性を持っていて出題された十二月のやりくりと云つたようなものに大した興奮を感じないのが残念でいささかはずかしい気がしないでもない。と云う訳で私の句を探しても、十二月のそれらしいもの一句もなく、その代りと云つてはどうかと思ふが、平素の私の句の貧乏たらしさは、自慢にはならないが、よろこだけ情けない句がと思われ程です。正直に貧しさ云えばおもしろがり押し切つた貧その中である。昼寝貧乏も聞けばまだ上ある長

屋

町内の代表になろうと思えば、まだまだ苦勞が足りぬわいとひそかに自慰を楽しみ派手な隣ははつきり憎みたいんだが

あり

いやな隣だが風除の位置にとこの世に捨ててものはないよ

うだ。毎年暮れ押しつまって来れば、誰からも忙しいうらうと云う挨拶されるが、私には忙しくも何ともないのでくすぐったい気持ちである。

人と云うものは自分に引較べて、自分が忙しければ誰でもいそがしいんだなと位に思うものらしい。

最後に一つだけ私の十二月の句らしいのが見つかった。

やる方もくだらんものと知って慰斗

水谷竹莊

十二月うれい風も少し吹け
うれいといえ「ボーナナス」を貰う時である。十二月はサラリ

マンにとっては嬉しい月である。しかし十二月はど金のいる月はない。正月の晴衣を、妻や子供に買ってやらねばならないし、借金があれば返済をせまられるであろうし、正月一杯のむ小遣も残しておきたいし、初詣でがてらの温泉行もしたいし考えるだけでも金のいることばかり。

人間の慾にはきりが無い、いくらあってもほしいのが金である。商人にとっても一年中で一番やりくり資金で金のいる月である。猫の手も借りたい程、多忙な月、そんな時

竹莊

相談をされても困る十二月この句が生れたのである。

実際、金の事にしろ、仕事のことにして、自分自身が多忙な時、人の世話までしては居られないのである。普通の月ならともかく、十二月は困るのである。

道行く人の足どりも、つもりが近づくにつれ、はげしいし、一寸でも、儲けたい心理からか靴なにかふんだと思う十二月

月の句が想い出されました「札東で頭をたく十二月」方正氏の句も思い出される。

しかし多忙であっても仕立屋へ何べんも行く十二月

月の句が想い出されました「札東で頭をたく十二月」方正氏の句も思い出される。

寒い風に吹かれて仕立屋へ正月の晴着を、受取りに行く時に吹かれる風は、うれい、十二月の風といえよう。

サツの音

後藤梅志

「十二月うれい風も少し吹け」という短冊は私も笑はもっている。

いつからか関西電力の本社に、先陣会(宇治川電力にちなみ)という句会が出来、私も毎回顔を出

していた。昭和廿四年頃と思うが、年末の句会に麻生路郎先生を招ぼうという事になり、宇治電ビル(九階)の日本間で句会を開いた。十人あまりの同人は、みな若手で、ボーナナスはたんまり貰ったが、気のつかぬ連中ばかり。私がトリスツイスキーを二本密附し小宴を張ったところ、みんな酔っぱらってしまい、吾も吾もと先生に短冊を強請した。その時の句がこの句であった。

先生も大分召上り、「おいボーナナスを少し廻せよ」などと冗談を云っては気軽に何枚でも筆をとった。その字は、実のびのびとしたいい字だった。私もひとつと書いて頂き、いまだに秘蔵しているが、その当時を思うとまことになつかしい。その日お約束した不朽洞会への私の入会は、遂に四五年のびのびになったが、この短冊の句が、私と不朽洞会を結びつけたようなものである。

私は戦争からこっち、ずっと、目標を失った浪人暮しで、いつも木風呂に這入ったつもりでいるが、戦後もなく、宇治電ビルに「UB食品」という売店を開き、どうやら食べるだけのことはできる。五人の子持ちではあったが、面倒くさいのであまり「やりくり」というものをやったことがない。その代りいつも最低生活しかない。これは日本の国情から道義的にそう極めたことでは、たとえ儲かってもせたいくはしない主義だ。よくしたもので、あまり金を儲けたこともない。

ある年の暮に、末っ子の長男がボーナナスを貰って来た。私は一杯やっている。「父さん正月にはいくら位いるの」と訊く。「そうさな一万円ぐらいいかな」と答えると、「オーケー」と其場でバラバラと千円札を十枚勘定し、最後の一枚をバチンと弾いて差出したものだ。これがいたく私のカンにさわった。「イラン」と云ってとらうとしな

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ大動脈
近鉄特急ダイヤ

大阪上本町発	近鉄名古屋發	宇治山田發
7.40	8.00	8.40
8.40	9.00	9.40
9.40	10.00	
11.40	12.00	12.40
13.40	14.00	14.40
15.40	16.00	16.40
17.40	18.00	18.40
18.40	19.00	
19.40	20.00	20.40

上本町 9.40 18.40 名古屋 10.00 19.00 發
はお薬で便利な新設特急ご乗下さい
・印は二階展望室つきピスタ・カー

座席指定特急券 5日前から発売
近畿日本ツリスト 交通公社 特急始発駅

近畿日本鉄道

い。息子はなんのこともやら分らず「ヘナナ親父だ」といった顔つきである。そこで私は開き直った。「貴様はバカな奴だ。親に金を献金するのにはバチンとはじくとは何事だ。今月はちよつと足らんからこの老万田は有難いのだが、封筒にでも入れて来ることか。ペラペラと勘定し、その上に、親の前でバチンとはじくとは礼儀を知らんも甚だしい。この金はそつちへもって行け」と、奇妙な苦情をつけたものだ。腹が立つと、私の顔つきは恐ろしいまで変り、殴りつけそうな見暮になる。息子はすっかりむくれ返って、其の場の收拾がつかなくなつた。トタンに「あーら勿体ない妾が貰っておくわ」という声が起り、後ろから手が出たと見るや、女房が攫って行ってしまった。これで私は小言の云い

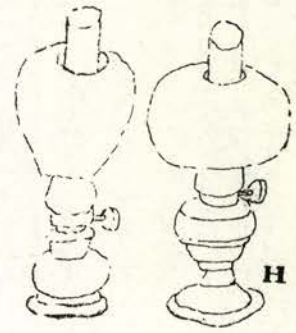
得く、息子はバカを見た形になつたが。内心ホツとしたのは私である。いつもこういつた有り様で、私にはどうも金に縁がない。したがって「年末の句」はいたつて少くないのですが、左に四句。

競輪で何んとかする気十二月
お隣りへ来たお歳暮をこと
ずかり 同
来年の手形見せっこして笑
同

師走

橋高薫風子

華やかな正月と背中合せの十二月は、実際的にはサラリマンにはボーナナスが、商人は大売り出しで景気を盛り上げ、経済的にも潤う筈だし、降誕祭にしても京都の恒例の顔見世興行にしても概念的には唯あわただしくどんよりと暗い月に思えるのは、生活の貧し



母と子の話

東野大八

四圍にいる私のおふくろが、十月二十三日に亡くなった。

たった二日寝ただけで、灯が消えるようにスーと息を引取ったという。享年八十一歳、天寿めでたくの方なので、方々のお悔みに対してはごく明るい顔で、その由をのべ何んとはなしに生前の礼を述べた。

ぎふが台風にやられたときいて「野菜をたんと送ったりや」と見などに言っていたそうだが、その話をきいて大阪の妹はこんなことをいった。「うちのかぼちゃが豊作やからと四国の松山の向うから孫の由紀子にこつて重たい石みたいな青かぼちゃを六つも大阪へ届けてくれましたん、大阪で買ったら百円見当のもんを由紀ちゃんもまた暑いところをツンツンいうて汗いっぱいかいてー」ユーモラスな話だが、今となってはそれも母の語り草の一つになった。

冷たく硬直した母を抱き起して納棺にかかるとき、ウエットな妹

は「池田の百姓の母がこんなところで仏様に成りやはるなんて」と足元のあたりで声をつまらせ「唐さんに黒襟、黒朱子の帯、そこからこぼれるフランネルの白いそのお腰は、僕の家の今春届けてあげたばかりのものだった。七十九で三年前、つれあいのおじいさんが亡くなったときから、このお婆さんは隠居所の小さい家をお婆さんに片づけ、キチンとしたタンスの中に、この身につけた品々を一つに包んでこの日に備えていたという。帯の中には大阪風に六文銭が一つ大事にぬいこんであつた。ネルのお腰が届いたとき、これは岐阜の息子からやな、これで下着も温くそろうた、と大いに喜んでいたので、この日の準備の品がこれでそろったことをいったものらしい。

「幸せを母のいびきの横で知るといふ句を作ったのは古い話で私が復員してしばらく起居をともししたときのものだが、復員といえば、私が片腕を無くして母の前に現れたとき、げっそりやせてみるかげもない私の顔にじつと眼をすえたこの母は、フラーリと下った片袖をその眼にとらえるなり「片手はどこへやったんや、アホウ、貰ってこい。出すときはみんなそろえて出したんや」と大粒の涙こぼして絶叫した。母の泣くのをみたのは後にも先にもこのときだけだった。片輪にされた母の屈辱と見る影もないわが子への哀切。骨ばった小さい母のその背をかかえて、私はあの日の母を昨日のように思い出して思わず涙をふり落した。

気の強い母で、私の知る限りの母は、ただの一度も「参った」という言葉を口にすることがなかった。道楽者の父と大阪から四国落ちしての惨苦あれこれは筆舌に尽し難いものがあったらしい。だが父の死期をその寸前に悟った母は、家族の前では惨めな顔一つし

二度来る十二月

夫 三田 不二

何をを選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心に優しい贈物かと存じます

1000円から
100000円迄

大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋
なんば日本橋
なんば四
大東 京都

映画誌を編集していた頃もそうだったが、生活と仕事の十二月号がほくには二度来るのである。世間様がシルバー・ウィークという十月には、もう師走号の原稿依頼に頭痛鉢巻きである。これは別に十二月にかぎったことではないが、とにかく季節感なしで因果なことにテンデ、ズレてしまっているのである。

「昨年の正月の七日、店からの帰りに、国電桃谷駅の改札口で、「モシモシ正月そうそうから不正乗車は困ります」

と、キップ氏がほくをよび止めた。で、ムツとして宗崩券（一カ月間）を見ると、12月23日で日が切れているのである。ほくはテックリ落したものだと思ひこみ、

「不正とはなんだ、買ってまもなく落したらしいんだ、もしソレが出てこない、もう一度買わねばならない。落した不注意は認めらるが、一カ月に二度買うことにならるから半分は国家でもて。（私鉄

ではないから）キミでは話にならんから駅長に会おう」と、ほくの権幕にキップ氏もへキエキしてか、駅長は不在で、カクアイはあすにしてくれというのである。ムリもない、ほくが帰るところはいつも夜の十二時近いのだから。

「乗客には親切サービスをモットーにしないさい、キミたちは公務員なんだから」とかサントカいい気分でタコを上げて帰宅した。

夜食をしながら二月号の仕事にかかつてフト思い浮かんだのが、十二月に定期を買うころは新年号も校了になる時分だ、ハテマてよ、と腕を組んだものである。

しまった！と思つたトタン不覚にも冷や汗が腋の下からダラリ流れ出た。

季節感のズレから買ったつもりで堂々十何日間の薩摩守をやつてのけたわけである。

師走といえは節道を行く人々の

なかつたが、独り居の夜にはどれだけの感慨が涙とともに蘇つたことだろうか。

「おじいさんが草履をもって向いにきややる。おじいづるを頼むで、おじいさんとそろいのあの高野山のおいづるをな」

おへんろの着る白い羽織様のものにべたべた赤い印判を押したものでそれを父に着せておくり、また残りの一つを着て母は棺に入ったのである。女房は亭主を送つてから死ぬのんが人の世のしきたりや、その点わてはしやわせやな。

母は、生涯大阪弁を改めなかつた。四国の片田舎でこれで押し通すことは、三十幾年か前の四国ではよほどの勇氣がいることだった。兄もその点、その小学校では大いに参つたらしい。

「何が大阪弁が悪いのんや、くそつたれめ」

そんな中で、私は幼児から母を「おかん」と呼んで育つた。その呼称が面白いと私をからかつた級友もいたが、私は得ゆずりの向ういきで、堂々と教室の中でもその「うちのおかんはな」とわざとひけらかしたものである。

「わてもエトツのとら、おやっさんもとらこの子もとらで都合三とらやが、これは強すぎであかんから一びき外へ出なあかん」ということで私は十六の齡から世間へとび出した。生そばやのれ

んのようなへんたいいろはの巻手紙がよく届きそれを読むのに大いに困つたが、やがてはそれが私だけにスラスラ読めるようになった。軍隊でも、この字が年輩の召集兵にうけて、私がよむと借してやつたら、その下手くそな字態だけで、もうしゅんとしてしまふ兵隊もいた。

「お前はトラで氣が強いからケンカやタンキをよく起すが、ええか、本當のケンカは、そのおでこにキズがついたときだけ死ぬ氣でやるもんやで」

「ものをいうようにかいてる下女の文」という古川柳があるが、この句を母にあてはめて、情のこもつたええ古句や、と私は今だにそう考へている。母の手紙には文學的価値は絶無だが、その血のつながりからする哀感や時と場所に応じた愛切さは、感傷のあとに快よい何かのニュアンスを残している。この後味のこのころの底

が、湖北の夜半の独り居にもどれだけ私にとって温いはげましになつたことか。

「お前が送つてくれる大陸の写真は、いつもモノ食べてるとこばかりやな、うまそうにたべてる」

帰つた当座よくそんな話をした。これは私のネタイで、遠いところにいる息子をいつも案じる母には、百枚の便箋よりも酔つた機嫌でとつた卓の中の顔にどれだけ

安心感を持つてくれることか、この点私の作戦は上首尾な成果を収めていたわけだ。

母は五十以後になつて酒を覚えていた。この春、生前の最後の母と一パイのんだとき、サカズキにほんの二、三杯だつたがトリー然となつてゐる生々としたその顔を見入つてゐる私のど仏が、幾度もこくりこくりと自然に動くのが今も懐しく感じとれる。ホロ酔の母の顔をみてゐる子供の私の喜びが、このように肉体的な一部にさえ異常な反応を呼び起す。母と子のこのつながりのなんと深く愛感にあふれてゐることか。母と子はつねに一つだ。

葬列がすんだのが二時、夜の七時が骨上げ。二時すぎから近所の人や身内と一ときの酒席をもつて酔つた私は、兄や妹とタクシ一馳けてそこを出た。疲れてよく効く昼酒のはてりはいつタクシ一が止ると二次会の席のように思われたはや着いたか、とはしゃいで出たら、キャバレーにあらずそこは夜氣救急のわびしい火葬場だった。

「こんな日に何をいうてんねん」こんな不肖の息子をいつもなら叱る母が、この夜に限つて私に何もいわず、ただ相変らず困つた奴や、と笑つてゐる顔が、私の心ではなく私の身体のとこかを感じとつていてくれた。

(三四、一一、三)

大阪市文化祭

第11回市民川柳大会秀句

足音も気ぜわしくガサガサしたす。そんなころ興行界は閑古鳥がいないのである。足音がソロソロのろい音に変わつてくると、小屋はウケに入るといふことになつてゐる。興行街と人の足音とは密接な関係があるものなのだ。

兼題「いのち」岡橋宣介選
人問零才痛い程乳房すう 乾 千太郎

「大阪礼讃」岸本水府選
七転びしても大阪よいところ 長谷川三司

「再会」中島生々庵選
再会に互いの距離を知つた 石倉 旅風

「政治」堀口塊人選
日本の政治あちらへ聞きに行き 本多 柳志

「青春」春一太田垣青波選
青春の沈みがちな恋を持ち 鶴飼 蝶朗

「夢」山下清祿選
母はまだ夢に生きてる綴方 岡崎はるを

「日本人」山田菊人選
伝統を野良着で包む日本人 上野山照

「ターミナル」後藤梅志選
ターミナル南京豆で生きる人 田中 金波

「裏表」田中南部選
昨日会つたばかりに葉書裏表 大田垣青波

「姿」長谷川三司選
話し足りない後姿へ夕焼ける 川村伊知呂

昭和34年10月25日

会場・毎日新聞大阪本社講堂

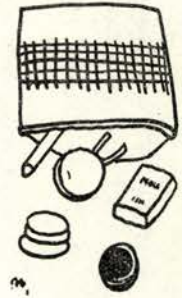
快晴に恵まれすぎ、その出足を戻つたかかれた短詩文
学連盟職主第部理事長も会場へ姿を見せられた。

野尻千草の料理教室

会員募集

大阪クッキング スタジオ

堺筋本町二丁目南50米西側
ユニオン洋装店階上 TEL(25)4943



句箋の中の女

三瀬島にもいろいろありますが、ここに登場場があったのは女を描いてはいずれおとらぬ家の人たちです。しかし三人二様、女性をとらえる川柳の間はちがうようです。

月謝で散財

松江 梅里

十人の中年男子にあなたの好きなタイプの女性はと云うアンケートをとったら殆んどが素人で何処か粋なところのある女と云う答が出た。所謂半しろ半くろがよいと云うことになる、勿論私も御多聞に洩れぬその中の一人である。

現代の若い人等とは時代の感覚も違っている、自然好みも変って来ていることは否めない事実である。併し私等明治生れのものにはやはり女らしさとか情緒と云うものをこよなく尊くともめ嬉しく味わいたい。昔は髪形に依って娘か人妻か友人かと判然と区別がついていたので品定めも容易であったが、近頃は全くミスかミセスか一見ただけでは判らない。素人が友人の格好してみたり、友人が素人を装うてみたり変幻極まわらない。私の若かりし頃の思い出として当時の娘達は実にしとやか

で和服に桃割れと云う純情型四五人連れだってお針子やお茶やお花に通う姿は、私の最も憧れの的だった。当時の映画で栗島すみ子、沢蘭子等好きなタイプの女優であった。近頃は精巧なかつらが出来た本物と少しも変らないが、脱いだ時には淡い幻滅とだまされたような感に打たれる。日本女性は断然和服だと云いたい、それもけばけばしい盛装よりもむしろござっぱりとした浴衣がけか裏服を着た女が一番美しく見える。純情娘型が好きであった私が、何故芸妓衆が好きになったかと云うことを白状する。

その頃私の家は橋一つ隔てて川向いが遊廓と云うまことに環境のよろしくないところに住んでいた。独りぼっちの可愛坊で大きくなった私をなんでも真面目な人間に育てよう廓の風に当てさせないようにと云う父の心づかいで、思春期に達した十五才の春から生花茶の湯謡曲、仕舞等と至ってお上品なお堅い趣味を強制的に習わさ

れた。当時の中流家庭の若者は學んでそらした古典趣味を持ったものが多かった。丁度五年間習って一応末生流の師範代の免許を買った時、一つ年上で芸妓になっていった幼な友達のY子が既にいい旦那に落籍されておなじ廓内で滝川と云う青楼を始めた。開店の前日各部屋へ花を活けてくれと頼まれその後月六回一六の日を決めて花を活けることを約束する、青楼の雰囲気を知ったのはこのときが初めてだった。純情娘にひきかえてければしたどぎつい厚化粧島田鬚鼻をつくおしろいの匂い、何かしら恐いような異様な感に打たれると云うて決して悪い気持はしない、むしろ素人娘にひきかえて飾り気のない言語動作に好感を持つことが出来たが、所詮は高嶺の花到底私のような弱輩の手の届かぬ玩弄物だと観念していた、花は大抵昼の間に活けに行く。三カ月も続いた頃、昼間ふだん着のまま踊りや唄のお稽古帰えり滝川へ遊び

にくる芸妓四五人といつしか顔馴染になっていった。女料のきも入りで五六人の芸妓に活花の教授をする事になり、月六回の稽古日が楽しく待ち遠しく思った。さて月末になって月謝は如何程かと聞かれて月謝のかわり月一回散財と云う遊びをさせてくれと冗談に云うたことがみんな手を叩いて喜んで賛成してくれた。そもそもこれが後に禍根を残そうとは神ならぬ身の知るよしもない。月末の最終の稽古日では宵から花つけ流して生花の花どころではないみんな自前の芸妓ばかりだからその日はお祭り騒ぎであった。今だったらずいぶん高い月謝になりそうだ。一年も続いたときは十五六人に殖えていった、そうなるも格式も少し上廻って来て社中は先ず美人であること、売れ妓であること等と条件がつく、いいあんばいに茶屋酒の味を覚えさせてもらってもう一月一回では我慢が出来ず、ついこちらも自前でおしのびで遊ぶことも覚えてしまった。或時友人に誘われて同じ廓のみよしと云う青楼へ行つたときのこと、友人のお馴染が折悪しく舟がついて(旦那が来て)居ったので、もらいを受けても来てくれない代りに聘んだのが私の教えている菊弥と云う芸妓であった。ヤーヤーと云うと忽ち次から次へと電話して例の五人が顔を揃えて飛んで来た、ひよんなどところでいいとこを見せて友人にあつと云わせたものだが、なん

しろまだ二十五六と云う若さでは堰を切った放蕩の血は、とめどもなく流れた。年齢を重ねると好みも変わってくるが、若い頃は自分より二つ三つ年上の女が好きで、欲を云えばむしろ現役の妓よりも落籍されて一年ぐらいと云うのが魅力があった。今なら淡島千景のような女これ以上いい気になって喋っているうちに語るに落ちて誰かに叱られそうだからあとは皆さんの御想像にまかせることにして筆をおく。

正直に云えば のろけになつてくる

芸妓すりやこそ 大臣も抓

一流の妓になって 振りむ

いつ来ても花つけ流しに手

が出ない

おくれ毛の 罪は 枕に聞

いてくれ

夜が明けて拗ねた時間が惜

しくなり

瞼の底なるひと

丸尾 潮花

あなたの作句のモデルになる女性を御披露したいと言われる企画部の御注文の意地悪さ、妻と顔を見合せて苦笑した。困っても書かなあきまへんねんやろ、と、花代子旦那さまの厳しい言葉である。常に作句のモデルになる女性、それは私の交際範囲の女性であり、日舞関係、川柳関係のひと

が多いと言うことはいなめそうもないが、主としてモデルとなる女性は一入であり、少女のような極端なまでの純粋性はないにしても童話の一と節位は口にして見る子供っぽさを失っていないひと、そして、どこことなくロマンチックな静かなあまさを持っているひと、ハッキリと言えれば私の両親からももらった性格に近いものをもっている女性であることに間違いない。ギリシヤ神話のなかに昔、男と女とは同じ胴体に喰い付いていた一身分体の一箇のものであったが、それではお互が何をすることも不自由を感じることを察しられた神様が男と女を切放して下さった、それ以後、切放された胴体は喜び乍ら別々のものとなって多くの男や女の中へ交ってわからなくなってしまうた為にお互がその相手を探し求め合うようになった、これが今世に言う恋であると言っているが、私のモデルである女性が私の性格に近い人であると言うことは神話のような恋であるか否かは別として少なくとも私の胴体の近くに居た人であるのかも知れない。

逢てからたった一日たっただけ
送られる傘はナンバの灯で別れ
雨の日の思い出ばかり残すひと
私は此の女性と逢う時は、どっちが雨男か、雨女かは知らないが、雨が降ったり、風が吹いたり、寒かったり、ともかく気象に変動のある日がたしかに多い。最も真夏は降られる日もないようですが何処となく、ロマンチックな思ひ出を私に残してきよならをして行くひとです。実感以外の想像句を作句する場合モデルを主とする場合と全然別個なもので作句する場合同じです。よく通動途上の電車や黄昏の窓に小鳥といふ時、または消燈をしてから、臉の底に浮んで来るひとをモデルとして色々なしさを振りつけ演技をさせて句を生み出します。少し艶っぽい句をねらった時などは、清元とか常盤津のようなもの時として小唄の振りなどを取入れて見ることもあり、或る時はモデルを色々な女性として動かす場合もあります。たとえば、「二男夫人に仕立てたり、パーの女であったり人妻であったり、純情な乙女であったり、句はモデルの線を通し私の性格を通してのものである限り同じような線を待つ女性として登場します。パーの雨泣かせてくれるひと
とも来ず
そっちらから米ねば出かける帯をしめ
追い詰めて袂でぶっただけのひと
返す気になって玄関の灯をともし
ひとさまの女と歩く星あかり
こうした句は実感句ではなく作り


った句であることを申し上げて置きます。和服趣味の私の句に出て来る女性には自然袂の女性が多いこともすでに御承知のことと思われまます。私が作句をつづけて行く限り私のモデルとしての女性も変らないでしょう、其れは一つには私自身の姿でもあり性でもあるからです。

花柳界の女
水谷 竹 莊

僕の川柳に女の句が多いのは、少年の頃から花柳界で育ったせいと思う、それに家業が料理店であったので、多くの芸者が出入した。そしてもう二十歳の頃には一人前の放蕩息子として或る芸者と深い仲になり、紅燈の巷に出没どころか、没しつくしたものである。だから浮気稼業の芸者の世界は、痴話と口説と、うそとまこと、色とりどりに飾られ、織りなされて、昼も夜も流れては、消え消えてはまた立つ、わさの女をいやという程、知っている。だから僕の句は、花柳界や芸者を「モデル」にし句が多いと思うのである。もうじき来やはりますとお女将待たせる気
乳一寸さわらせてから言う
無心
もてるはず馴染の仲居いてくれる
僕の女好きは、川柳界ばかりでない、職場でも有名になつてい

る。あの戦争の苛烈な最中でも、空腹騒ぎの中にあっても、女に夢中になって居たという、けいれきの持主である全く困った男である自分でも思っているが、大体女にのろい性質であるから、妻に見れば、實際手におえない、しるものである。逢いに行く靴とは知らずみがく妻
妻のぐち素直に聞いて寝てしまし
浮気されても夫の肩をもち女といえはやはり日本情調のあふれたのが好きだ。
満員のホームに目立つ日本

酒 清



灘・魚崎
大塚合名会社醸

女を知る以上は、恋するまでゆか、恋されるか、そこまで行かねば、本当の味はわからないと思ふ。
日記書く楽しみ恋があればこそ
恋捨ててまでも出世がしたいのか
情熱が足りないわよとせめられる
恋を楽しむには金が入る新婚の二人朝から目玉焼湯の宿の楽しみ混浴ともいえず
台所電化にしてと甘えられしかし金はなく共恋は出来る
貧乏な恋は盛り場歩くだけ金づまり二人を恋のままに置き
女を語るつもりが恋になってしまった、それだけまだ若いつもりではいるが、
「鍵」読んでいい歳してと笑われる
こんな句が出来るところをみると、もう老いらくへ一歩近づいているのだろうか。
しかし
恋人もないのに切符二枚くを発売したら、早速方正医長さんから、どうして恋人がないどころか、あり過ぎて、困っているくせにと、一本やりこめられた。
やはり僕は女好きで一生を終りたい。

私のいいたい

ことを

いつている句

— 本社句会の
席上から —



戸田古方

新聞週刊というものがあって、それもこの間すんだようですが名人のきらいなものに新聞紙先代の鴎次郎文をよんだのです。銭勘定と新聞をよむことがきらいだったというのを匂にしたのでした。

では新聞とは何でしょう。真実を迅速に大ぜいの人に知らせる。こんなところでどうでしょうか。この真実を知らせることと、迅速に知らすこととの間には矛盾がありそうです、がそのことはあとで考えることにして、真実とは何かを考えてみましょう。

真実とは宇宙の法則に通ずるものであり、とにかく真実によって人間はここまで育って来ました。それが文明であります。

科学万能しかし機械は狂ったこれも私の句ですが、その文明

にも長所、短所があり、長所が大きい程、短所も大きいことを知らねばなりません。だから間違ってもあったら大へんなことになりません。

しかし、現代人間に利用されている文明あるいは文明の利器は真実になかったものだけで、間違ったものは落伍してしまつたことはいうまでもありません。とはいえ最後まで、どこまでいってもそれが人間に役立つ、人間を幸せにするとはかぎりません。

十四、五世紀から人間に大きく利用されはじめたのが火薬ですが、平和的利用より、人殺しに多く利用されてしまつたのです。ダイナマイトの発明家ノーベルがノーベル賞をもうけた心もわかるのであります。現代の問題、原子力も丁度、火薬と同じような立場

に今おかれています。

賢い人人は知恵をしぼって、人間の幸福にのみこれを使おうと努力しています。アイクとニキタの第一回の会議もどうやら成功したようです。どうぞ平和的以外に使わないようにしてもらいたいものです。

その平和的利用にしてもです、関西原子炉は地元の反対で難航しています。鉄道開設に反対した人が

世も末と嘆き時代について酔舛

と没落した轍のあとを踏みそうにも思えるのです。とはいいいながら路切れないのです。

一方では宇宙ロケットが月旅行を実現しかけているというのに。日本人どこかへ帰還したくなり

花村 追いつめられているのはあえて日本人だけではありますまい。ノイローゼです。黒沢明が「生きものの記録」を作つた頃にはさほどに思わなかつた人も、次ぎ次ぎに

「ゴジラ」「ラドン」「地球防衛軍」とせめたてられますと、危険が身近になつたようにも思えてならないのです。

しかし考えてみますと、人口がだんだんふえてくると、生きるために産業革命にまでもちこみ、資

本主義は批判を

超えたものになつてしまいました。

た。そして改良、進歩が一応人間に奉仕して米は米ました

が、原子力は、真剣に人類の滅亡を考えざるを得なくしてしまいました。

文明をすすめるためには自然

と斗いつづけて米ました。それにしても現代人は自然をおそれなさすぎていのでないでしょうか。

バンガロー村 大小舎の暑いくらしがして

みなの 人間はふるさとをこいしがるものです。しかもとめて不自由がつづけているのかもしれない。

父さん卵焼きが好きでおく三羽 粗影 卵はどんなにしても、人間の手では作られません。

豊作の予想を百姓まだたてず 旭童 時を作るより、田をつくつてい

工業技術院長賞受賞

軽やかな書味 楽しいお仕事！
適した硬度をおえらび下さい。

HOP 学生 事務 製 図

筆 鋳

- ★ 師走句会 ★ 川雑支部
- ★ 淀川句会・時、3日(木) 六時
- 題、音・上役・あべこべ、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局★玉造句会・時、10日(木) 七時、題、友情・締めくり・ケイヤ、所、市電玉造南百米大阪信用金庫★阿倍野句会・時、16日(水) 六時、題、火の車・P.R・思い出、所、旭町二丁目金塚会館★にしなり句会・時、20日(日) 六時、題、母・クリスマス・軌道吏、所、玉出新町一ノ一(南和園) 後藤海志居★堺句会・時、17日(木) 七時、題、男親・正札・気晴らし、所、堺市九間町東二丁 八木摩太郎居★333句会・時、19日(土) 七時、題、閉会・取得・壁、所、堺市老松町島野工業KK★浜寺句会・時、25日(金) 七時、題、結末・自宅・わがまま、所、南海本線諏訪森駅北一丁諏訪森会館★南海電鉄句会・時、日(木24) 六時、題、無賃乗車・赤字・幕、所、難

金 泥 集

課題「言いわけ」

麻 生 菫 乃 選

悪友に言いわけさせる電話口	阿 茶	言いわけも出来ぬ無口 <small>（へつけい）</small>	花代子	ハイティーン言いわけはず反抗し	花奈女
宮仕え辛い言いわけ妻にする	同	暴君の耳を言いわけ素通りし	同	言いわけをさかなにお流れ頂戴し	孝 江
言いわけは忘れまして事がすみ	同	老後の保証申しわけ計り	若 菜	言いわけの様子小店がよくもけ	小 菊
言いわけをむつかしく書く声書	同	言いわけをさせぬ男のボスに似る	同	言いわけを信じてくれてこそはゆし	春 栄
言いわけを父は青筋たててきき	小 石	言いわけはゆつくり聞くと電話切れ	良 子	ゼスチニをまて言いわけ手間をり	美音子
言いわけへ母はそばから口を添え	同	言いわけの要る顔になる二日酔	同	言いわけに行けば不服を言い並べ	徳 子
つつこめば言いわけしどろもどろなり	同	言いわけのパイプやたらにゆるらせて	奈良子	言いわけは無用指紋がものを言い	周 甫
言いわけを相手の視線避けてする	清 子	言いわけのくやし涙が先に立ち	同	言いわけは世におきて席を立ち	初 穂
言いわけをする間もなしにどなられる	同	言いわけのそれより先に涙ぐみ	きさ子	言いわけを妻もおほえて今日も留守	白 美
いいわけをしたばっかりに嘘がばれ	同	土壇場へ来た言いわけは目をうつり	同	延着の証明貰う人の列	知 恵
言いわけの通らぬ妻に敷かれとり	陽 子	言いわけを聞きかえされて座りかえ	梨 花	ボケットのアルチロマンチに言いわけし	万 女
言いわけを聞かずに受話器下す音	同	手をついて言う言いわけの自己嫌悪	同	言いわけの智慧も借りてく	つ ゆ
言いわけのように見合へ素顔で来	同	言いわけを考えているデートの娘	都詩子	言いわけはいつもの友がだしなり	美 代
言いわけへ上役新聞読んだまま	梨 里	言いわけを阿呆になつて聞いてや	同	いいわけをしても無駄やとさる年	美 代
上役にまたさそわれたことにする	同	家近し言いわけ胸で繰り返し	俊 江		

次回題「電化」十二月末〆切

す。

七号台風が通ったら、もう台風が米ないかのように思っていた役人たちが十五号台風はちっとこたえたのか「今後に備える」などいい出しました。

十五号台風が人災であるかどうかを考える前にやはり自然の力にすなおに頭を下げるを得ません。テレビの日本の素顔「泥の町」で「ここは以前は海でありました。土を盛り、堤防を作りました。が、今や海はその傾分を取りかえしたともいえます」

ドキンとする言葉です。地盤沈下が進むといつか日本が全部海中に没する日がないといい切れない

かもしれません。

新聞の知らせる真実は迅速性のために割引きせられることがしばしばあります。又起ってくる全ての事実を正確につたえようと、報道そのものには間違いはなくとも、間違いはないのかと思われることもあります。朝令暮改といますか、「言明」したあとから、ちがった「言明」が出たりしますと、全く途まどいさせられることがあります。本体がおかしいのですから報導陣をせめるわけにゆきません。一体この報導とはどんなことでしょうか。

5WということがありますWho (誰が)、When (何時)、What (何を)

Why (何故)、Where (どこ)、Who (何人)、How (どう) としながらかも、いろいろの力の波

ere (何処)、what (何を)

なく、揃い並べられることからはじまるのです。それは極めてアト・ランダムになることも亦やむを得ません。日記、一年の出来事、年代記、年表と類を同じくするもので、これそのものは時代を語り、人間の営み、人間の育ちを考える資料にはなりかねます。整理し、並べかえ、さらに解説を加え、時には批判さえも必要になってまいります、しかしこうした処置が加えられることが過ぎますと、時に真実がゆがんでも来ます。学問的良心から純粹になろう

に押し流されてへんに色づづけをされる場合があります。明治以後の教育歴史がそうであり、唯物史観にもそれがたいはいえませんが、自然科学の真実だけでなく、人文の世界にもやはり犯すべき間違いの種はあるものです。これが人間の宿命というべきものでしょうか。

何もない庭に雑草美しい

ぐるぐるまわりになってしまつた考えをもとへもどすにはこういう句にやはり魅かれるのでしよう

掲載の句主名入の句は川柳雑誌「三八九号」(三四年十月号)より引用

一(一九五九、一〇、二二)

波高架下親和クラブ★宇部句会・時、6日(日)一時、題、実力・ホーナス・涙、所、沖ノ山温泉クラブ★米子句会・時、6日(日)一時、題、誓文抄・酒屋・惚れる、所、米子市公会堂日本園★鳥取句会・時、12日(土)六時半、題、仕上げ・光、所、りいち画房★岡山句会・時、12日(土)二時、題、文化・赤字・にぎりめし・反省、所、浜田久米雄居★明和研究句会・時、13日(日)一時、題、頼杖・異端者・屋台、所、鳴尾町新明和興業KK★京都句会・時、16日(水)夕、題、凄まじ・笑騰・同感、所、四条繩手仲源寺★西宮句会・時、18日(金)六時、題、火事・催促、おでん、所、阪神西宮北出口スグ労働会館★備前句会・時、20日(日)七時、題、地下道・借金・蕎麦・白髪・忘年会、所、浜田久米雄居

川柳 婦人友の会新春句会

日時 1月24日午後二時

会場 中島邸

兼題 南海本線諏訪ノ森駅南西へ三丁・電話浜寺八二四「すし」麻生菫乃選「夢」中島小石選「大阪弁」太田良子選「おみくじ」山川阿茶選

席題 当日発表(二題)

会費 三百円(食費共)

投句先 投句だけの方は郵券三十円同封・〆切1月22日

大阪市南区二ツ井戸町 山川阿茶宛 二三



古物

長野文庫選

おさがりの背広も似合う歳になり 全信
実益と趣味で古物を漁って来 南天
流行を追うて古物は母に着せ 井蛙
国宝の仏像不具なものも混り 葉光
捨てたはずの古物姑は出して来る 一鶴
新作を古物に見せる腕を持ち 圭井堂
工夫さえすれば古物とも見えず 九呂平
考えた揚句古物染に出す 静水
払出す時は古物の値に変わり 蜻蛉
自慢してた程も古物屋値をつけず 天悟空
大切な古物子供は馬鹿にする 初甫
古物商この椅子ですかと立って見せ 保夫
物好きが古物だけに趣味を持ち 豊年
古物商さつと買われて物足らず 宵明
古物の値打骨董屋に見て貰い 白葩
趣味といえ古物ばかり集めて来 庸佑

一

路

集

古書にある言葉借りて社の訓辞 進之助
戦前の出来を古物屋くり返し 淀月
古九谷の皿は女中に洗わせず 光郎
勿体なげにはほろの古物見てもらい たけお
古物もあって調和のある生活 尚史
押入れに後生大事とほろをため 山椒坊
変人の古物屋へ変人の客 川鳥
古壺に騒いで見たがただの壺 正乘
古物で買った将棋の歩が足らず 参無子
古物と聞いてそろばん入れ直し 夢路
古物屋に私の好きな柄があり 鶯汀
床の間に据れば古物とは言わず 八九寸
まるで古物屋ですと老婆のうさがり 藤波
古物になってバイヤーの目にとまり 宗太郎
古物と知って観光客も来る 南牛史
古物の符牒も客の顔による 木魚
お金にもならぬ古物よくたまり 雄声
珍の字をつけて古物高く売り 鶴声
古物を買って修繕費がかさみ 卯之助
狂寄がいて古物を捨てさせず 十九平

掛時計古び明治の音で鳴り 代仕男
珍品の茶器を古物から拾い 慈雨
使えると母は古物を棚に上げ 生薑
捨て難い趣きと云う古物趣味 高志
二足三文と云う古物を大事がり 古心
古物屋へ靴と仏像並べられ 和三郎
新家庭古物の火鉢家宝めき 美音子
古物屋へ刑事の六感ビンと来る 欄
妻老いぬ古物ばかり集めてる 不村
古物店とこそせましと並べて 恵二朗
思い出があり古物を捨てきれず 実男
古物をリレーさせてる子 沢山 巖

五客

床の間に置いて古物に出る値打 雪峰
古物商売物だけは褒めちぎり 清心
箱書きについ古物屋も買いかぶり 淀月
古物屋のおやじもどこか古物じみ 愛鳩
殿様の名で古物屋の店に出る 宵明
人
思い出があり古物を母捨てず 雄々
地
その時に生きてた様に骨董屋 句念坊
天
古物屋に趣味ほめられて買われる 蘇水
軸
古九谷も目の効く客へかしこまり

筆不精

山根白星選

パーカーを背広にさして筆不精 南天
筆不精してる間妻となり母となり 佐代子

書くよ書くよと直ぐには書かぬ筆不精 白葩
人様のことには別な筆不精 宵明
筆不精記びて幸福そうな文 静水
筆不精くどくど記びて誤字或字 静水
筆不精秘書に書かせるのも嫌い 豊年
電報の様な手紙が子から来る さんたく
筆不精恩師は苦笑だけ残し 九呂平
火の様な恋をしてます筆不精 九呂平
筆不精前ぶれもなく押しかける 井蛙
幸運を掴み損ねた筆不精 雄声
国文科出とは思えぬ筆不精 吉枝
筆不精同士しんから酔いつぶれ 淀月
筆不精誤解をされてや々と書き 光郎
どう理屈つけてもやはり筆不精 光郎
書かなけりや書いてよと云ふ筆不精 東天紅
筆不精が書いた手紙の長いこと 山椒坊
鏡台の前は動かぬ筆不精 川鳥
筆不精会費きちつと送って来 忠太郎
筆不精たまに書いたら出し忘れ 晃康
来るたびに書体かわる筆不精 たもつ
ツイズだけ欠かす子出して筆不精 雄々
町の世話ばかりやいて筆不精 宗太郎
筆不精すばり用件書いて来る 実男
筆不精シャボテンだけはよく育て 圭井堂
筆不精絵葉書一枚きりの旅 同
台風の見舞を呉れた筆不精 夢路
筆不精浮世の義理をうるさがり 卯之助
筆不精くらしのせいにしてしまい 鶴声
ものぐさと言わず主人は筆不精 九紫
大学を出てもせがれの筆不精 慈雨
筆不精出で筆不精父は呑むが趣味 同
筆不精に理解出来ない筆不精 巖

筆不精ながい電話で喋り合ひ 葉光
 筆不精ではない書く間のない稼ぎ 古心
 前略と書き続かない筆不精 孝風
 筆不精堂堂として悪びれず 高志
 恋文をタイプで叩く筆不精 高志
 筆不精の不覚は恋をだしぬかれ 代仕男
 筆不精賀状も来たり来なんだり むしな
 結婚をしてから知った筆不精 愛鳩
 一二行書いて止めてる筆不精 同
 筆不精に書かず硯に水を入れ 和三郎
 小卒は伏せて社長の筆不精 和三郎
 筆不精墨はすらせただけで止め 旭峯
 巻紙に書く手を持って筆不精 生薑
 返信用切手に負けた筆不精 十九平
 親の氣も知らず悠悠筆不精 不村
 筆不精無心の手紙だけは書け 同
 筆不精だからちよいと顔を見せ 恵二朗
 筆マメな妻貰った筆不精 同

五客

妻はもうあきらめてる筆不精 愛鳩
 揮毫と書いて寝転ぶ筆不精 宗太郎
 出張で来て驚かす筆不精 淀月
 便箋も切れたまんまの筆不精 敏子
 筆不精故郷の夜をまだ喋り 宗太郎

人

筆不精心の整理つかぬまま 吉枝
 タイミング外れてからの筆不精 雪峰

天

筆不精墨まですってあてがわれ 生薑
 筆不精いよいよニヒルな僕となり

行末

金井文秋選

人様の行末ばかり見る易者 周甫
 行末の夢一つずつ消えて古い 全信
 南無阿弥陀末は婦人にやらぬ仏櫃 井平
 行末は孫に頼る氣不肖の子 万女
 行末に夢を画いて生きて居り 青路
 行末はやはり蛙になりそうな 佐代子
 どうせ俺の子だと行末あてにす 南天
 ドック入り行末思ふ閑が出来 どんたく
 行末が不安か後妻にへそくられ 堅持
 末の娘に行末託す不仕合せ 九呂平
 行末を保険屋保証してねばり 井蛙
 細ながら退職金でめどが付き 一鶴
 行末の設計だけはちゃんと出来 和梁
 この歳でこの悪知恵を親案じ 圭井堂
 行末を思ふ獄舎の灯が暗い 梢月
 行末のために植林汗をふき 北海坊
 行末の夢精一ぱいに子を育て 静水
 行末を賭けてひよわな子に育て 蜻蛉
 行末を考え大学無理にやり 豊年
 大学へやりたい頭案じられ 初甫
 行末へ世間そんなに甘くなし 保夫
 再婚へ身の行末を占える 夜潮
 寺の寄附祖母行末を疑わず 宗太郎
 行末は庭木もほしい土地を買い 雄々
 行末に希望つないだランドセル 三舟
 良縁がまだ行末にありそうで 鶴汀
 行末へ夢乗せ襪取り替える 八九寸
 行末の暗き夫の位碑抱く逸名

行末を待つ銀行のドア軽し 逸名
 行末の不安へ連れ子して嫁ぎ 光郎
 子の方が父の行末案じてい 尚史
 ハネムーン子の行末も夢に入れ 山椒坊
 行末が思いやられるグラカード 川鳥
 ルンペンも行末思ふ秋の空 忠太朗
 行末のペール曆と共ににはぎ ともつ
 酒気芬々先のことなど鬼に聞け 同
 議員にはよからう書きよ名を選び 南牛史
 知らぬげに秋の終りをすたく虫 吉枝
 行末はあなた任せの寄生虫 同
 僅少の年金あてに生き残り 句念坊
 行末を誓うたはずがもう別れ 徹也
 行末はあんなものさと泡を指し 妖人
 死刑囚もう行末へ眼が開け 繁太郎
 行末を見抜いたように易者言い 庸佑
 行末が頼り切れない子をもらい 愛鳩
 行末を語るベンチの恋たのし 卯之助
 恩給を貰う行末信ずる目 むじな
 七十でおける保険をほそほと 涼人
 行末のともあれ今日は職があり 九紫
 行末の夢胸に秘めアルバイト 蘇水
 悪友の談義行末忘れさせ 同
 ゆくゆくは議席得る気の委員長 代仕男
 行末へ頼る我が子がビケを張り 和三郎
 行末にこだわり過ぎて嫁き遅れ 雪峰
 行末は婿とのれんのしつけなり 孝風
 神童も末は凡夫で終りそう 蘭
 行末は神のみが知る籤を引き 古心
 説教を聞いて行末不安がり 不村
 行末は云わず一日ずつの幸 登紀
 行末を追う手を易の灯にさらす 同

行末を案じる今宵義母として 恵二朗
 行末へつもり貯金のたよりなき 圭木
 行末を真つ暗がりの独り旅 旭峯
 晩年の身のふり方へマネービル 進之助
 明確に死が行末にあるばかり 葉光
 ドン底へ落ちて行末こわがらず 一三天
 行末を親は暖簾に基礎を置き 高志
 行末は将になる子か眉太し 慈雨

行末にふれて白けた差向い 恵二朗
 行末を思わず生きて来た寒さ 登紀
 行末の見えてる父をまだ嘸り 敏子
 子沢山末たのもしい奴もいる 白葩
 行末へ養子我慢の日を続け 実男
 行末を案じた芸で喰いつなぎ 笑太
 行末は裸になると連れ戻り 南牛史

見料はとり行末を案じさせ 生薑
 恋人が会社の行末まで案じ 宗太郎
 天
 行末がわびしく夫婦猫を撫で 菜春
 行末を明るく子女に取り巻かれ 同

須崎豆秋著
 川柳ふるさと
 句集 明和
 明和病院句集
 句集 明和
 価一〇〇円
 送費一六円
 次 取
 川柳雑誌社



ステーマン女史(中央)式場隆三郎医博(左)麻生路郎主幹(右)

来日のステーマン女史

デンマークのステーマン女史(Miss Ingeborg Semann)が外務省の招きで来日された。

女史は現在コペンハーゲン大学で講座をもち、文化的、社会的に不断の努力をなつていられる方である。女史は一八八九年(明治廿二年)生れで、こし七十才であるがその活力は今でも壯者をしのぐものがある。女史はかつてロンドン大学やコロンビア大学に学び、語学の天才で英、仏、独、露、伊、瑞、諸の七カ国語は自由に読み、書き、しゃべれるし、日本、中国、スペイン、ギリシャ、ラテンその他でおよそ十五カ国に通じていられる。十数冊の著書の中には哲学に関するものもあり、日本文学に深い知識を有し芥川竜之介の小説集のデンマーク訳もあり、表題外のものも数冊中だ。

女史は熱烈な親日家で、日本人でデンマークへ留学または旅行された方々女史の並々ならぬお世話になった方は数えきれない。

デンマーク日本協会の設立やその後の運営は主として女史の力にまつところが多い。私は九州観光を終えて伊勢志摩の観光に向われる女史を近鉄上六駅に十一月十四日の早朝にお送りする役目を生々庵医博から依頼されたので思わざる光栄に恵まれたのであった。車道役として接待委員長の式場隆三郎医博が随伴されて来た。お二人を上六駅にお送りする私は車中で読んで

もううために、拙著「川柳とは何か」と「川柳雑誌」の十月、十一月号をデジケートした。女史はハンドバッグからロンドンで印刷された非常に便利な日本語字典を見せられた。これを機縁に川柳がデンマークへ行くことは大きな欣喜である。出来ればデンマーク語を介して日本独自の川柳詩をお国へ紹介してもらいたいと述べおいた。翌十五日にも午後四時半に上六駅へ出迎え、スエヒロで夕食を共に

大会は十一月十五日正午から新鴻神宮で開催。▼北日本川柳大会は十一月一日午前十時から八戸市更上閣で開催。▼第十一回松戸市文化祭川柳大会は十一月八日正午から戸定館で開催。▼羽曳野病院第七回芸術祭は十一月一日から八日まで同病院講堂で開催、短詩・絵画・写真・生花の諸作品が展覧された。▼川維大聖寺支部の川柳作品展は十一月三日錦城小学校生徒会室で開催、伊藤茶伝氏、野村味平氏の作品をはじめ百点を展覧、すこぶる好評であった。

柳界展望

句会

▼本堂忘年句会は十二月六日(日)午後一時から日本橋北詰の大阪観光ホテルで開催する。本年榎尾の句会を飾るよう一人でも多く御出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)句会は十一月十七日午後八時から三休橋南詰中島小児科診療院上で開催。▼大阪市交通局文化祭参加川柳大会は

十一月十四日午後五時から扇橋交通局病院サニウムで開催。路郎主幹の柳話があり盛会であった。▼コトヨ川柳会(大阪市)は十一月二十日午後五時半から黒田国光堂で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)は十一月二十六日午後六時半から、難波の親和クラブで開催。▼大阪蓮花病院川柳会は十一月二十八日午後二時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼大阪府芸術祭参加第九回富田林市文化祭川柳句会は十一月八日午後一時から富田林高校同窓会館で開催。▼豊中市市民文化祭第二回川柳大会は十一月二十九日(日)午後一時から豊中中央公民館で開催。

▼加賀市民文化祭川柳大会は十一月七日午後七時から加賀市立大聖寺公民館和室で開催。▼西宮市民文化祭第十回川柳大会は十一月十五日午後一時から西宮労働会館で開催。▼国立島根療養所開設二十周年、華川柳会創立七周年記念句会が十一月二十三日午後一時から同療養所本館日本閣で開催。▼広島市短詩型文芸川柳大会は十一月八日市内山陽文徳殿で開催。▼川維松江支部句会は十一月十日夜石橋町の木ふる児宅で開催。▼川維岡山支部句会は十一月十四日浜田久米雄居で開催。▼川維下関支部句会は十一月十五日下関駅会議室で開催。▼第二回越路時亭川柳

大会は十一月十五日正午から新鴻神宮で開催。▼北日本川柳大会は十一月一日午前十時から八戸市更上閣で開催。▼第十一回松戸市文化祭川柳大会は十一月八日正午から戸定館で開催。▼羽曳野病院第七回芸術祭は十一月一日から八日まで同病院講堂で開催、短詩・絵画・写真・生花の諸作品が展覧された。▼川維大聖寺支部の川柳作品展は十一月三日錦城小学校生徒会室で開催、伊藤茶伝氏、野村味平氏の作品をはじめ百点を展覧、すこぶる好評であった。

まで岡山市天満屋百貨店で開かれる助け合い運動の「歳末書画工芸展」に出品される。▼小浜牧人氏(西宮市)は十一月十六日膀胱結石手術のため明和病院に入院加療中の由。▼前田伍健氏(松山市)は十一月十五日NHKの川柳腕くらべに出演された。▼若本多久志氏(西宮市)は十一月十七日社用で金沢市へ出張、白山連峰の雪に冬近きを思われ、「かに飯で百万石の味にふれ」の句信を寄せられた。▼若本多久志氏著「親ごころ子心」が十一月十一日付交通毎日新聞で紹介された。▼水谷竹莊氏(大阪市)は十月二十一日産経会館で開催された電信電話記念芸能祭職員腕自慢で黒田節を踊り、最優秀賞を受賞された。▼蛭子万寿さん(愛媛県)は本誌十月号の路郎主幹の「奥信濃の旅」を読み故人省二氏からお話を聞いていられた志賀高原を思い感慨無量である。▼山田季哲氏(広島県)は一夕崎駅で八島白竜氏と会い秋の夜長を柳話に更かさされ、「趣味故に思わぬとこで友と合い」の句信を寄せられた。▼不二田一三夫氏(大阪市)経営の大阪座売店が九月一日類焼の災禍を蒙られたが、四十日後に大阪の南座売店を経営

消息

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社文化の夕(大阪市)

11月7日 午後六時

会場——文楽座別館四階

秋もいよいよ深まり、作旬シーズンを迎えて集う柳の顔も明るく、女流作家の出足もよし、文化の夕べにふさわしい雰囲気をかもし出す。

今月も東京からはるるご出席の高志氏や戎橋の丹青堂で本誌を買って初出席の三重県前川柳洞氏等、活気あふれる柳宴のにぎやかさだ。
生々庵副主幹が「いのち」と題されて手の不自由な盲人が唇で点字を読む尊い姿を感銘深く柳話された(次号本誌へ発表)

席題の部では葉乙女さんが天位をとり日ごろの精進が実を結び、兼題の部のトリ、不朽洞杯を贈けた春葉選の天位はペテラン川村好郎氏に輝き、依然一回だけの十一氏がひしめき興味はまた十二月へ持ち越されることになった。

「今からでもおそくない」という自信をもつ人もあり、いよいよ土壇場へ来たようである。閉会九時——。

出席者—路郎・一三夫・すむ・泰・圭井堂・いさむ・紫香・与呂志・櫻子・

(F)

十悟・柳志・葉乙女・文蝶・文福・静馬・三舟・梅志・生々庵・悦子・摩天郎・多久志・徹也・狂二・凡吉・薫風子・一十・一瓢・保美・十四郎・武助・光輪・文秋・白柳・鶴汀・古方・晃・清人・杏花・敏明・繁雄・恒明・榮・柳洞・好郎・和榮・良子・井平・高志・舟遊・淡舟・柳宏子・正一・牧人・博遊・貴山・満秋・いわを・半歩・庸佑・春葉・旅風・梅里・梨花・阿茶・宏子・霞乃

兼題「アリバイ」 北川春葉選

アリバイが崩れ女がワツと泣き 孝風
妻の酌アリバイ崩す手と知らず 山椒坊
アリバイがあるのほどこまやうなる気 南宗
逢引の事もアリバイの中にあり 良子
アリバイもなく濡れ衣のままで 過ぎ 柳宏子
一審と二審アリバイくいちがい 摩天郎
アリバイの壁を破れぬ差し戻し 杏花
外泊のアリバイ課長の証明書 与呂志
アリバイに自信巡査を軽う視る 文蝶
アリバイの口を合せる電話かけ 一十
事件ある度にアリバイあつてなくす 庸佑
苦心したアリバイあつてなくす 鶴汀
アリバイはリテラサイドにいる写真 旅風
アリバイを打ち合せて飲む君と僕 与呂志
アリバイが整い過ぎてあやしまれ 静馬
成り立つたアリバイボスに迎えられ 満秋
アリバイの証し二男がしてくれる 柳志
アリバイは妻に見せたくない名刺 武助
アリバイを信じた顔で逮捕され 敏明
アリバイへのれんのマツチだけ貰い 清人
すぐばれるアリバイ一度は言うてみる 十四郎
家内には言えぬアリバイ喋らされ 庸佑
アリバイの土産大阪駅で 買 梅里
アリバイを妻が信じてホツとする 潮花
マージャンというアリバイは効かず 一三夫
アリバイにアリバイのいるもどかしき 生々庵
アリバイの土産電車へ置き忘れ 文秋

悪友がいてアリバイにこたかかす 満秋
悪友にアリバイ一つ借りが出来 一三夫
冷やかした店アリバイに生きて来る 武助
アリバイも引受け酔いどれやち泊め 好郎

兼題「若主人」 清水白柳選

若主人坊んと呼ぶ客持てあまし 梨花
独身が社内の魅力若主人 一三夫
若主人片仮名使う店にする 満秋
漱石の本手離さぬ若主人 梅志
壁の絵をマチスに変えた若主人 参無子
早仕舞しなはれと若主人 去に 一十
庭石も平気で埋める若主人 圭井堂
先代の二号へ仕送る若主人 多久志
日曜は教会に在り若主人 一十
野球部のピッチャー譲らぬ若主人 狂二
理論的には赤がお好きと若主人 生薑
ロケットになりたくはない若主人 杏花
大学の頃がよかった若主人 寿栄
手はじめに店士間にした若主人 静馬
家訓だけ変らぬままで若主人 文秋
若主人今日店員とまちがわれ 雄峯
若主人爪噛むくせがまだ抜けず 和菜
若主人何大学か皆知らず 保美
若主人羽織着て出る会が増え 薫風子
医科を出て阿呆ばかり言う若主人 泰
実権はまだ番頭の若主人 徹也
若主人家潰すだけ苦勞人 舟遊
若主人たぐんにもれずマツハ族 失名
角帯をしめても似合う若主人 葉乙女
若主人やつぱり保守へ肩を持ち 曜子
週休制なかなか話せる若主人 嘸
若主人はならす程張り切つて 嘸
そろばんで割り算出来ぬ若主人 嘸
角帯で逢うひともある若主人 静馬
店の間で洋書を囃る若主人 潮花
デパートへ斗志を燃す若主人 一三夫
出先からまだ戻らない若主人 杏花
愛称の方が呼びよい若主人 紫香
南宗

兼題「貧乏」 丸尾潮花選

若主人ビルの谷間で木を打つ 句念坊
喉一つ若主人ではビントと来ず 恒明
料理屋に生まれ気のつく若主人 梅志
大学はビリで専務の若主人 梅里
刺刺もきつちり私う若主人 三司
運転手なしで出て行く若主人 阿茶
若主人だけが苗字で呼んでくれ 貴山
若主人センスがあつて気に入られ 白柳
家だけがなんで貧乏やときかれ 雄峯
貧乏へ笑いの多い日があり 保美
ザツザツに言つて貧乏うまが合 若芽
親の愛子の愛貧しい屋根に住む 孝風
卒中で死んだ貧乏したまんま 三司
孝行を表彰される程貧し 満秋
貧乏人案外うまいものを食べ 舟遊
遠慮して遠慮して貧乏人座り 一瓢
貧乏を親から受けて子へ譲り 牧人
貧しさへ浮気を誘う友も来ず 文秋
飼主の貧しさ犬も負けてくる 参無子
貧乏な親へどの子も欲しがらず 牧人
貧乏のしわが頬から増え始め 杏花
やり越しの荷物へ貧乏神も溜め 柳志
引越しの荷物へ貧乏神も乗る 南宗
貧乏と縁を切るよな娘がそだち 正一
大器晩成などと貧乏苦にして 恒明
病氣してから貧乏と仲がよし 白柳
麦めしを好きで喰べてるわけなし 静馬
一升買いつても女嬉しそ 曜子
一合の酔いが明日を忘れさせ 文蝶
阿呆な事言うて貧乏にうなずいて 十悟
晴着きて子は貧乏にうなずかず 杏花
貧乏を自慢にすなと叱られる 阿茶
貧乏を承知で来たと妻平気 泰
折角の泥棒へ土産もない暮し 曜子
貧乏に耐えてる指のふし太く 葉乙女
籠輪にこり貧乏に輪をかける 一十
貧乏の口癖連がない連がない 好郎

アンテナが貧乏あざけるように立ち
貸し借りもない貧乏で妻と酌み
一杯の焼酎うまい職があり
夜逃げする話へ先に子を寝かせ
白い手に貧の気象を言われたり
貧乏の子には難がせぬ汗をふき
貧乏にさえ見放されて来たふたり

兼題「後悔」 八木驛天郎選

後悔をあけすけにした軽い筆
後悔をすなよヤクザの拾台詞
後悔をしてまのやと矢張り惚れ
言い過ぎた悔はひとりになってから
欲に欲ついで後悔ばかりなり
後悔をそれとは見せぬ意地っぱり
後悔をすればこんなうまい酒
後悔をせぬかと念を押ししておき
後悔をせぬ約束で惚れて見る
後悔もせずと憎まれ口をきき
後悔をしてからやさしい犬となり
後悔へ柱時計が一つ打ち
後悔へガチャリと手錠はまる音
後悔が保護司に肩を叩かれて
添い遂げてからの後悔母に告げ
後悔をしている肩を叩かれる
後悔はいたしませんと書き送り
後悔は言葉の端にちらとだけ
ご意見が頭を打ってからわかり
後悔は遠くに忘れた二度の縁
後悔の涙へ鞭のきびしすぎ
後悔をしてた昨夜をもう忘れ
後悔をせぬ気強さがうとまれる
後悔をいやと言う程味わされ
後悔をしてるのか妻返事せず
後悔をしたが女はあきらめず
後悔を婦人科へ来て処置をさせ
運命と諦め切れぬ悔を持ち
後悔の男の涙みせられる

柳 生々庵
生々庵
半歩
高志
参無子
博遊
潮花
八九寸
孝風
春菓
牧人
十四郎
貴山
一鶴
生々庵
半歩
多志
杏花
文秋
清人
多志
紫香
光輪
梨花
一三天
好郎
狂二
徹也
杏花
半歩
凡吉
淡舟
潮花
紫香
三舟
恒明

兼題「役者」 西 いわを 選

見合写真後悔しなやと引つこめる
ひげ刺つてこなんだと少し悔い
後悔をしてると仲人泣きつかれ
馬券手に後悔して顔で去に
落選を後悔もせずまだ立つ気
郷愁が後悔をする ガイド下
再出発もう倒産も悔いていず
家出されいまま頑固悔いの日
後悔をしてもだんだんなる落日
後悔も遠い思い出老夫婦
後悔のわき見もせずと働く気
後悔の涙頭で返事する
後悔が今に尾をひく妻と添い
後悔をしてて女は謝らず
家出の娘まだ後悔をして居らず
後悔の涙は男に候わず

一瓢
春菓
いさむ
敏明
圭井堂
狂二
好郎
文秋
生々庵
文蝶
三司
阿茶
紫香
鶴汀
柳志
三舟
舟遊
梅志
柳志
悦子
古方
文福
一三天
摩太郎
貴山
潮花
武助
鶴汀
庸佑
阿茶
紫香
晃
文秋

兼題「更年期」 後藤梅志選

声優の顔案外なお粗末さ
セックスを売物にして旅役者
役者にもなれず会社の芝居好き
ご趣味はと聞かれ役者もゴルフする
二枚目は素顔でうん喰いに来る
憧れの思ひかなってエキストラ
御粗末な顔も役者に要ると言う
役者にはしたくない子がなる
生活を生きぬく眉を書く役者
茶屋での役者自分の声になり

多志
白柳
半歩
春菓
柳志
狂二
十悟
武助
柳志
葉乙女

兼題「落書」 菊田いさむ選

落書で全校生が騒ぎ出し
ローマ字の落書高校生らしく
伝言板落書らしいのもまじり
落書も楷書で書いて法律義者
落書の一つ捜査の決手得る
落書の方が個性を持って居た
落書の作をいささか蔭ではめ
落書で岸内閣を批判する
落書の名所も秋の色となり
左手の落書矢張り右より
旅の駅落書ゆっくり読んでみる
落書も派手な簡借りの子沢山
賞められて落書かまくら名乗り出る

繁乙女
清人
博遊
杏花
白柳
十悟
淡舟
恒明
三舟
旅風
良子

色紙短冊
書画用品
大坂戎がし第
丹月堂
電南セニセニ

千畳敷子は落書を読みあるき 摩太郎
 山の寺前の落書見当らず 紫香
 山門のあんなとこま名が刻られ すゝむ
 名文の落書がある山の寺 与呂志
 本堂の裏は落書ばかりあり 紫香
 落書きの元祖にされた如意輪堂 一三夫
 国宝の壁に阿呆な名を連ね 杏花
 落書のある塀柿の実が赤い 梅志
 落書のなかで添うてるだけの恋 潮花
 落書のあいあい傘に僕と君 舟遊
 落書の通りに窓が芽生えて来 柳志
 落書をしててもねむい学科なり 悦子
 落書も暇らし社長留守の秘書 柳宏子
 あてつけの落書秘書に消さしとき 生々庵
 落書はワンマン社長のことばかり 泰
 天平時代と知れて落書騒ぎ出し 生々庵
 落書のようにスターにサインされ いさむ

(庸清記)

川雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

夫婦連れ安全の旅人目にも 周防
 旅先で恋人に会う忙しさ 吟声
 老いらくの二人極楽京の旅 虹月
 ジェット機に世界はちむ空の旅 銀溪
 観光の旅の話に日記帖 浪之助
 旅の宿独りで淋しい呑んでやれ 美潮
 駅弁のうまさ旅行者だけが知り 八丁堀
 フラギョールに送られハワイの旅終る 風草
 旅の宿やっぱり我が家は良い所 舞座
 初旅にお守り持ったす親心 紅茶
 旅の宿妻によく似た娘に出会い エス子
 旅日記郷土の香りも味も書き 暁舟
 旅に居てしみじみ解る妻の良さ 惠津子
 旅にある娘を思いつつ草むしる 泉木
 旅の寝のどこか寂しい旅の宿 平八郎
 旅姿映画ながらも惚れて見る 浅太郎
 御先祖を洗えばみんな旅鳥 おし乃
 旅もよし貯えもよし老夫婦

旅婦り赤毛布だけ伏せて置き 緑星
 月の旅笑った奴も支度をし 旋風
 浮気する時間も入れて旅程くみ 魔花麗
 旅日記伏せ字の多い個所もあり 快歩起
 旅で聴く鐘郷愁の音が鳴る 斧平
 初旅に嬉しい故郷の駅が見え 拜山
 旅の子は今日この辺と地図で追い 柳葉
 この旅程キセルで行こう気が揃い 峯円

川雑 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

しやつくりと思案まんと崩されて 太路
 国道の夜半さわがし定期便 柳宏子
 家三角にして国道ができ上り 満秋
 きく咲いて犬のあたまたに花がおち 慎太郎
 菊の香に二十一世紀がちかし 薫風子
 きさんじな娘が野菊活けてくれ 泰
 菊の鉢世間知らずの妻でよし 水客
 台風に逢い気の毒な曲馬 団言也
 サークスのハタハタと鳴るテントにて 白柳
 よく似てる子がサーカスに居る知らせ 暖子
 サークスの老馬も芸に生きる顔 旅風
 サークスの呼物という曲になり 文秋
 夫送り出し鼻唄で掃く広さ 保美
 負けている耳に鼻唄いまいまし 舟遊
 鼻唄のどこか淋しい今日のパパ 舟遊
 尋常に別離の朝の飯を盛り 千尋
 いつの日か会う日もあろう露が降り 牧人
 来ることのない島に手を振りぬ 三舟
 夜汽車の彼れは敬礼していった 敬太
 夢多く島に別れる日の教師 すゝむ
 一合の酒が別離の膳にあり 満秋
 別離からめて逆立ちを子始め 青風
 サークスが来て逆立ちを子始め 梅志

川雑 淀川支部句会 (大阪市)

木村水堂報

弱いとは云わず勝敗は時の運 六童子
 済みません済みませんと気が弱く 和楽

人情が絡むと弱い生れつき 水堂
 天国へ愛を結びに行く弱さ 敏明
 総代の母は自宅で針仕事 東洋男
 総代がお国訛りでよくねばり 若菜
 妻のサイン無視して夫まだよほれ 花村
 くせの出る頃でそろそろみこし上げ 尚徳
 このくせがなおれば家も立ったはず 全信
 叱られて自分のくせに腹を立て 礼司
 金持っていても貧乏ぶるいをし 陽子
 飲めば泣くくせとも知らず介抱し 幽谷
 娘の意見死んだ家内のくせになり 句念坊
 くせ無うて大平無事に勤め上げ 三十郎
 子に説諭してからやめる梯子酒 香林

川雑 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

ほんとうの心が覗く二三行 晃
 二三行アンダーライン引いておき 太路
 二三行書いた履歴書こよりにし 生薑
 二三行伝言板の字が怒り 薫風子
 先生の批評うれしい二三行 奈良子
 慰謝料を取る気赤赤塗りたくり 葉光
 大慌てさせたが赤チンだけで済み 暖子
 赤チンの母へすりきず逃げ回り 舟遊
 新築へ秋刀魚惜し気もなない煙 十悟
 ざあまて秋刀魚の栄養価値をほめ 一三夫
 ふるさとの四国ブームをうれしがり 若芽
 世界の眼がみな向いている月世界 美智子
 交差点ブームに乗ったオートバイ 喜仙
 電化ブーム妻の期待にまだ副えず 敏明
 知らぬ間にブームに乗った移きよう すゝむ
 作家老い新語ブームに追い付けず 文秋
 もく拾い平気で靴の下のぞき 亜鉦
 百キロも平気と單車事故忘れ 山椒鈿
 メスを執る平気な顔が憎らしく 仲字呂

川雑 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

全快だダルマに片目あげようぞ 六童子

和 洋 菓 子

朝 日 堂

大阪南市区電戎橋御堂筋角
TEL (75) 7284

全快へ飲み友達がとんでくる 柳宏子
 不眠症やんで不眠症となり 清
 他のものもそばつえくと不眠症 句念坊
 ヒヤリする咽喉の剃刀に眼をうつる 守信
 内風呂へ剃刀をまた置き忘れ 文秋
 調子よい話へお茶を入れに来る 一栄
 宣伝のミシンは調子よくかかり 清子
 調子づいたら止らない噂なり 白柳

川雑 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報

ボチ袋貯金する子と使う子と 芳子
 ボチ袋行く先々で筆を借り 保美
 辞退した手先でさぐるボチ袋 生々庵
 火葬場で泣き泣き渡すボチ袋 摩太郎
 遠慮したわりに少ないボチ袋 末一
 パトロンに資本をまわす程儲け 梅里
 見込まれて資本も出そう嫁持たそ

いざという女悲しい資本持ち 敬也
 アイデアはいいが資本はさうり 小石
 出し合った資本ボチボチもてる 雄声
 伏面の資本で会社乗っ取られ 圭井堂
 たった一つ層台が私の大資本 さいこ
 紹も紗もあくびして終電車 信太郎
 欠伸には欠伸で返す倦怠期 狂二
 つじつまを叱った母がつけてくれ 好郎
 サンプルを頼めばさうり送って来 高志
 持ってきた見本気に入らぬがなし 白柳

川維 備前支部句会 (岡山県)

三村柳風子報

苦笑い煙草の煙にまぎらせる 美智子
 風呂焚いていると煙へ歩を早め 万女
 お茶をたく本家の煙で帰って来 あやめ
 台風が来るより怖い 手術前 貞子
 台風の余波のしめりへ大根まき 流風
 台風が隣の雨戸置いて行き 竜泉
 台風へ母停電の用意もし 伊久野
 遠慮して先を越されて泣きわいり 西岡
 新婚へ遠慮要点だけ話し 久米雄
 遠慮してのさ芽出度い荷をどけ 幸仙
 無理もない失意の友へ酒をくみ 誠司
 一人娘の無理へ貯金をおろして来 東岸
 俺だけを頼みの綱にされた無理 柳風子
 松茸を一本買って秋の膳 芳月
 名月へ句座かこむ窓あけ放つ 秋月
 新婚のまないたまでも木の香り 一声
 まないたのくぼと共には妻は老け 草二

川維 広島支部句会 (広島市)

平田越舟報

花束に生活の糧かけて生き吐 吐川
 子守る方がベンチでよく遊び 湖水
 あくび感染若妻と大笑い 日進
 美容院亭主子守の年雨入れ 自然
 初めから勝負が見える駒揃き ときを
 宴会は南国土佐から歌い出し 月歩

見送りの花束座席一つ占め うしを
 はったりがすぎて足も肩すかされ 上利
 日曜の公園子守のババとババ 越舟
 炬燵での子守子供は外をはい 弓路
 足もとを案じてくる部下が酌ぎ 秀月
 音沙汰がなければ無事でもとする 二三天
 牛乳ビンふれ合う音で起床知る たけし
 民謡は父やかましくないラジオ 方川
 定員を超えて地獄へ行くコース 美文

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

美しき嫉妬へ負けぬ紅をはく 親生
 貧しさを或日嫉妬にすくわれる 際
 やきもちを妬かせた後の酒うまき 句念坊
 負けている嫉妬はかくれよとする 司郎
 電灯を消して呉れない日の嫉妬 晴芽
 母の財布の財布の空を知る 甫三
 空箱が美しすぎて捨てきれず 春抄
 食うことの怒り哀しく土を見る 豊次
 怒ってる人に煙草をつけてやり 山紫樓
 損と云う一字に怒り萎えて行く 鳥雀
 会釈する顔を二種類持つている 海三
 静かなる会釈は胸にさし 紫蘭
 ポートを池畔へよせて恋がある 千潮
 亭の灯を笑う池畔のネオン塔 和三郎
 恋の炎消す如く池畔に立つ女 正夫

川維 西宮支部句会 (西宮市)

若本多久志報

吸ばらい課長おしやべり止めさせる 修見
 名月へ河童も池を出たくなり 夢路
 次々と咲くおとなりの花を賞で 一十
 おとなりの夫婦喧嘩へ耳をたて 高志
 虫の声やおしやべりも秋感じ 敬太
 しやべる竹藪らしく猪口の敬一 杯
 窓越しにとなりへ用事たのむとき 芙蓉路
 ひそひそとしやべって長い立話 寿榮
 頼母子を落して帰るまるい月 牧人

勝負のせきびしホープの敗れる日 郁三
 月がえてきて職人寝るとする 舟遊
 登坂の漫会がむつかしいホープ 弦月
 馬喰のつめたく馬を追うて去に 千尋
 月の道鞍馬天狗と出合いそう 薫風子
 おとなりに坐った美人で落付けず 不二子
 おしやべりに世話をやかれて不安がり 花美
 おとなりでまたうの子がめしたく 満秋
 馬で越すのも名所の一つなり 三舟
 年寄りのおしやべりははらまで 甘美
 台本をまるめてホープさんは行く 秦
 終電車月もいっしょに走ってる 敏明
 馬の背に高原の秋 晴れ渡りすむ 静馬
 大げさな手ぶりで唾のよきやべり 静馬
 小刻みに舞台の月が上ってき 多久志

川維 明和病院支部句会 (西宮市)

西尾青一路報

どよめきは形勢逆転した 空気 東雲
 空気とは風のことかと子供供く 凡人
 険悪な空気くきめでほぐれて来 策平
 空気まで運んで来たよな山便り 京子
 夜の空気婦警へ重くのしかかり 弦月
 ビルの窓四角い空気入れかえる 留三
 看板も出さず呪いよくはやり 丹謡

本社句会

★本年度全出席者

- 与呂志・文蝶・旅風・い
- さむ・一三夫・狂二・満秋・
- いわを・多久志・庸佑・舟
- 遊・保美・潮花・半歩・柳
- 宏子・すむ・薫風子・梅
- 志・阿茶・牧人・静馬・暎
- 子・葉乙女・白柳・文秋・

スマートで 着心地のよい

O.S.K.

レディマード

大坂商店

大坂市東区南船場一丁目二番

電話 (94) 17455563番

呪いも金の力に左右され 寿栄
 呪いを末っ子運届届うて責め 芙蓉路
 病歴がもう呪いも信じない 球
 噓に隣の家が火事にされ 山友
 童顔な年寄り頑固も憎めない 義子
 いたわられずと年寄りに入らず すむ
 としよりを連れ横断に気を使い 半歩
 年寄りの余生へテレビ買うてやり 舟遊
 ゆく年に勝つと知った坂に来る 船遊
 当然の様に年寄腰を掛け すみ江
 名月へ芭蕉気どりがいておかし 花見
 月まるし母の想い出ばかりなり 千尋
 塗り替えたマストは高し月高し 夢路
 月一つ松一本の眺めなり 薫風子
 蟻の巢へ何の卵か運ばれる 満秋
 新婚の目玉焼つづく朝となり 朧
 卵生む雛の音がす故郷の朝 祐郎
 仲裁の声にますます 興奮し 青一路
 興奮はさげようババの気もわる 泰
 興奮の握りこぶしがふるえてい 牧人

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

お目出度い日はもう近い爪を切り 雄々
 一生へ目出度く借りた高島田 菜瓢

・ 散 歩 の ペ ン ・

▼主幹がステイマン女史と会われた記事などもっとスペースをとるべきではあったが、お仕事の関係上あまりごムリも言えなかった。こんどは、川柳デジマックへ行く。

▼一九五九年のフィナーレを飾る十二月号だけに、ペーじのゆるされるかぎりにぎやかにした。まず主幹の「名句と難句」を軸に、高鷲曲鈍氏の、「月への道」は二回にわたる堂々五十枚を越す力作、東野大八氏の「母と子の話」や、奥津啓

一朗氏の「川柳髮形考」等、本誌ならではのものではある。▼伍健、妻太楼、古方諸氏の快筆に、女性を描いては川柳の三羽鳥といわれる梅里、潮花、竹莊三氏の「句箋の中の女」も好読物だ。恩師の名句「十二月うれしい風も少し吹け」をタイトルに、春葉編集局長以下部員総出演でご漫遊をうかがうことにした。「本号もいい出来だ」と、先生からのお言葉をうかがうまでは、やはり部員一同、気が気でないというのが本音である。

▼いい原稿がたくさん次号まわしになった。古くさいことばだが、うれしい悲鳴ではある。新春号も慎重に編集会議を開き、勝算われにありと、自信をもって新春号着手へ待機している。二期待願っておきます。

▼忘年句会は道頓堀電停北詰の大阪観光ホテルときまつた。句集「私達」出版記念を開いたゆかりの会場である。ちょうど文楽座別館の北東の方角で、階上から見ればお向いといったところです。ふるってご参加ください。

▼四円の年賀ハガキがアツというまに売り切れた。局員でさえ一人百枚より割り当てのないところや、全然手に入らない人もあったとか、別に年末の運配に關

柳人交歓年賀廣告を募る

新年号へあなたの年賀廣告を

- ★一口金二百円。幾口でも申込んでください。
- ★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
- ★一口分は五分の一段組三分。
- ★原稿締切は十二月六日着便
- ★広告料は前金のこと(郵券代用でもよろしい)

川柳雜誌社

係はないのであろうが、今からこんなことが気になるのも、十二月は闘争でイヤな感じ。しかしシブン助け合運動だけは心あたたまるものがあ

が、青い羽根の海難救助や、黄色の道路はあまりピンとこないようだ。緑の羽根の緑化運動はシーズンがいいだけに明るい感じだが、炭鉱地帯の黒い羽根は色が色だけに何か暗いものを感じる。その目標額は一千万円だときいたが、東京都知事の退職金が約三千万円だと新聞に書かれると、これもイヤな感じがする。赤い羽根は共同募金、白

各種毛織物卸



加賀纖維株式会社

大阪市東区南本町二丁目一番地

最古の歴史を誇るストーブ

センター

燃料を 焚く手間を



センター 興業株式会社
東京 大阪

printed in Japan

(禁轉載)

川柳雜誌

第三十四号

定価 六〇円 (送料四円)

B列5号 毎月一回一日発行

昭和三十四年十一月廿五日印刷
昭和三十四年十二月一日発行

大阪府住吉区西内四丁目二五番地
発行所 川柳雜誌社
電話 大阪 六〇八一
長持口 大阪 七五〇一

大阪府住吉区西内四丁目二五番地
行印刷所 麻生 幸二 郎

募 集

課題吟募集

白紙 (十句以内) 小西無鬼選
無化 (十句以内) 津田麦太楼選
変力 (十句以内) 小浜牧人選
夕食 (十句以内) 戸田古方選
ムグ使 (十句以内) 杉谷湖山選
火事 (十句以内) 木村水堂選
(十一月十五日締切)

毎号募集

近作柳樽 (雑誌十句以内) 麻生路郎選
川柳塔 (雑誌十句以内) 北川春巢選
文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
(毎月十五日締切)

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼ 『課題吟』は誰でも投稿が出来る。
▼ 『川柳塔』の投稿は不朽洞会員に限る。



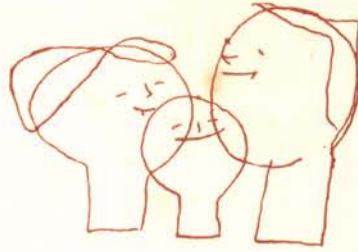
あみ上りのよさ!

スキー毛糸



倉敷紡績株式会社

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ④551-2

K.C TEX

ケー・シー・テックス



株式会社越田商店

本社 大阪市東区瓦町四丁目 TEL ④-4573-6 番
 東京支店 東京都千代田区神田豊島町四番地 TEL ④-7886 番
 一宮支店 一ノ宮市花園通り二丁目 TEL ④-3919 番

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

12月号発売中!! 100円(〒8円)

特集

X マスケーキの需要増大
 眺めるケーキから
 うまいケーキに
 牛乳はなぜ安くなるか
 佃煮は郷愁の食品

食品強化剤レリジン
 新時代の結晶ぶどう糖

◇海外情報 ◇特許告知板

「展望台」主食・罐詰・菓子・酒類・香料等

大阪市北区 本町5丁目5番34号 TEL ④345231-4 食品と科学社 大阪6702番

不眠 昼間療法!



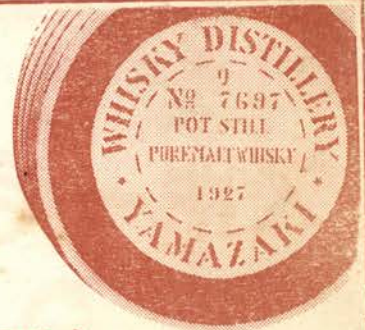
日中のイライラもすぐとれる

昼間の服用だけで、夜自然に安眠が
でき、日中のイライラや不安感も
とれ、明朗・能率的な生活を送れる
習慣性のない安全な新薬です
スッキリした頭で作句の為にも!

晝はすつきり・夜はぐつすり

ノクタン錠

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌



万人
その名を知り
万人
その味を賞す

世界の名酒

サントリー

オールド 1,600円・角瓶 1,250円

洋酒の寿屋

いま一番ほしいもの



葉山ピアノ



日本楽器

カタログ進呈

大阪支店 南区心齋橋筋二丁目 TEL ☎ 5956

梅田店 北区梅田阪神百貨店一階 ☎ 2783

郵便物認可
一日発行

編集者
発行印刷人

監生委員 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉島区内方代街五丁目二五番地 電話大阪六〇八一

振替口座大阪七五〇五〇番

定価六十円(送料別)